

きぎずなど思いやりが日本をダメにする

長谷川真理子×山岸俊男・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

「心がけ」「お説教」では社会は変わらない

デカルト以来の人間観を書き換えた進化研究／お説教で済めば政治は要らない
少子化問題を進化から考える／なぜ哺乳類は「子育て」をするのか
本来ならばヒトの妊娠期間は三年！／ヒトは共同繁殖の動物

「おばあさん」がいるのは人間だけ？／母性神話のウソ

統計を見ずに「心」のせいにしたがる人々／「心」で社会を解釈してはいけない

出産立会人はなぜ必要か／ヒトの育児は社会ぐるみで行なうもの

少子化現象はなぜ起きるか／エネルギー配分から人生を考える

ペット化する子どもたち／スローガンよりも制度設計を／「進化」していない心

サバンナが産み出した「心」

「南海に浮かぶ桃源郷」／なぜミードは「神話」をでっち上げたのか／氏か育ちか
進化が分かっていたいなかった文化人類学／なぜヒトはヒトになったのか

「いい変異」「悪い変異」はない／すべての生物は「勝者」である

知性とはサバンナ生き残りのツールだった／生き延びるための「社会」

「社会脳」仮説とは／言葉はゴシップ・トークのために生まれた？

友だちの数の上限は二五〇人／ホモ・エレクトウスの「出アフリカ」

脳を大きくして気候変動を乗り越えたネアンデルタール人

脳はツールボックスである／「社会」の誕生／「幻想の共有」で社会は作られている

仲間意識でサバイバル／「つい」助けたくなくなる心／なぜ人は神を信じるのか

「∴」のマジック／「日本人らしさ」という幻想／「ボールペン実験」はどこが間違っていたか

「日本人の美德」は状況の産物にすぎない／社会もまた環境の産物である

「協力する脳」の秘密

なぜヒトは社会作りに成功したか／「心の理論」／サリーとアン

ヒトだけが「世界の状態」を語るのはなぜか／なぜ幼児はおしゃべりが好きなのか

人間社会を支える「心の読み合い」／共感する力とは／情があっては政治はできない

詐欺師の「心」を考える／リーダーの条件とは／情けは人のためならず

助け合うチスイコウモリ／人はなぜ献血をするのか／「協力する知性」の誕生

ヒトはなぜ親切に振る舞うのか／裏切り者を探知する知性

なぜルールは守らなくてはならないのか

「空気」と「いじめ」を研究する

131

なぜ歴史は繰り返すのか／チンパンジーは絶望しない／社会の暴走を招くものとは
「グループシンク」はどこでも起きる／なぜ「空気を読めない」ことが批判されるのか
クジャクの羽根はなぜ派手になったか／ヒトは文化的ニッチエの中で生きている
「日本の伝統」は本当にあるのか／悪い心が「いじめ」をもたらすのか？
いじめをなくす最も確実な方法／傍観者がいじめを助長する

教師は「後ろ盾」であれ／輪切り教育では学べない「社会の作り方」
教科書では学べないこと／社会問題はなぜ生まれるのか
一筋縄では解決できない「秩序問題」／厳罰化で犯罪は防げるか
社会的ジレンマとは／直感的な犬と理性的な尻尾
道徳律は「理屈抜き」／六種の道徳律／七つめのモラルとは

なぜヒトは差別するのか

181

差別と偏見を分けて考えよう／なぜ差別は生まれるのか
差別はなくとも、偏見は生まれる／なぜ「村長」は必要か

日本的雇用は差別の塊／なぜ企業は学歴を気にしたのか
「予言の自己実現」が差別を助長する／ピグマリオン効果
「スローガン」では差別は解消できない／制度改革こそがなすべきこと
差別追放は社会の繁栄に直結する／均衡点にトラップされた日本

日本人は変われるのか

205

グローバル化社会というニッチエ／ドーパミンと好奇心

ジーン・カルチャー・コエボリューション／なぜ日本人はリスク回避型になったのか
チンギス・ハンの子孫たち／なぜ日本人は和を尊ぶのか

交易が人々の生き方を変える／なぜマグレブ商人はジェノバ商人に敗れたか

なぜローマや中国は帝国を作れたのか／日本的雇用という「神話」

非正規雇用が増えると受験競争がなくなる？／倫理で社会問題を捉えてはいけない
引きこもりは究極の他人依存である／「コミュ障」恐怖はなぜ生まれたか

口べたのどこが悪い／日本社会に起きている価値観の混乱

グローバル化をなぜ恐れるのか／臨界質量を超えたときに社会は動く

マンションのゴミ出しルールを徹底するには／非正規雇用は本当に「問題」なのか
新卒採用は「常識」なのか／「六つの道徳」で語る危険性

まぎずなや思いやりが日本をダメにする

二種類あつた相互協調性／「びくびく」する日本人／二つの独立性

なぜ若者はびくびくするのか／「いい子」であることを強制される日本社会

仲良くすることは正しいのか／「思いやりが大切」の落とし穴

プレデイクタブルになろう／大英帝国を支えたジェントルマン

タイタニック号の救命ボート／多様性とは「違うこと」に耐えること

「心の教育」よりも「思考力のトレーニング」を／終身雇用は「人間的」か？

「原理」を持った人のみが信頼を勝ち得る／充実した人生のために

幸福と時間は結びついている／幸福の究極形は「死」？

恋愛とギャンブルの共通点／最大幸福社会よりも最小不幸社会

江戸時代は北朝鮮並みの監視社会だった／日本ははたして「美しい国」だったのか
安心社会と信頼社会／守られているから冒険もできる

人間関係が煩わしかった「三丁目の夕日」の時代／お説教よりも制度構築を

写真提供 アマナイメーヅズ

ゲッティイメーヅズ

装丁・本文デザイン 大森裕二

図版製作 竹中 誠

編集協力 岡田仁志

「心がけ」「お説教」では社会は変わらない

第1章

デカルト以来の人間観を書き換えた進化研究

山 岸 長谷川先生、今日は「対談をしたい」という私のリクエストにこたえていただいて本当にありがとうございます。

長谷川 いえいえ、山岸先生とこうやってお話しできるのは本当に楽しいし、学者として刺激にもなるので大歓迎ですよ。

山 岸 それはこちらと同じです。私は社会心理学で、長谷川先生は進化生物学、行動生態学と専門分野は一見すると大きく違うようだけれども、実は本質的な部分での問題意識やテーマ設定は共通で、だからいくらお話ししていても飽きない。

長谷川 そういえば、私がケンブリッジにいたとき、山岸先生が私たちの家を訪ねてくださったことがありましたね。

山 岸 あれは何年前だったか……私がオックスフォード大学で講演することになったときにうかがったんですよ。

長谷川 あのときのことは今でもよく夫のひさかず壽一（東京大学教授、行動生態学・進化学）と話をして懐かしがっていますよ。

山 岸 眞理子さんと壽一さんがフランスから持ち帰ったワインを飲みながら、いろんなことを

話しましたね。

長谷川 そうそう、あつという間にワインが一本空になって。

山 岸 もう少しおいしいワインがありますからということ、二本目が出てきた。とてもおいしかったです。

長谷川 それも気がついたら空になっていて。

山 岸 三本目は本当に本当においしいワインでした。

長谷川 ワインもとてもおいしかったけど、話のほうがもつと楽しかった。

山 岸 そのときの思い出を私の担当者である集英社インターナショナルのSくんによく話していたら「そんなに長谷川先生と話が合うんだったら対談したらどうですか」と提案されたんです。

長谷川 まあ、それは光栄ですね。

山 岸 いや、正直言うと、私が研究している社会心理学についてはこれまでも何冊も本を出してきました。それらは幸いにしてたくさんの方に読まれているんですが、しかし、そこでの知見がどれだけ社会に影響を与えているかと考えると、まだまだ心許ないという気がするんです。

そこでSくんとはかねてから「どうやったら今よりも多くの人に読んでもらえる本を作れるだろう」とディスカッションをしてきた。でも、私がやるとどうしても、堅い方向に行ってしまう。これは私の性格も関係していると思うのですが、私自身が書くところロジカルな展開になるし、また、言葉の定義も厳密にしたくなるので、どうしても一般向きにならない。それで私もS

くんも困っていたんですが、そこに「救いの女神」が現われたというわけなんです。

私一人だと堅苦しく、きまじめになってしまっても、いつも当意即妙とういそくみょうな受け答えをしてくださる長谷川先生との対談という形ならば、話に広がりが出てくるし、読者にも楽しんでもらえるのではないかと考えたわけです。

長谷川 責任重大ね。

でも、「なかなか伝わらない」という思いは私も共有しています。私の専門は行動生態学、進化学とということになっていますが、私の研究も結局は「ヒトとは何か」、さらに言えば「ヒトの社会とは何なのか」ということを考えていくもので、現代の世界に直結するテーマですし、ここ数十年の進化研究の発展はデカルト以来の人間観を完全に書き換えていると言っても過言ではありません。

ただ、そうした知見がはたしてどれだけ社会に還元されているかと考えると、忸怩じくじたる思いがありますね。

お説教で済めば政治は要いらない

山 岸 長谷川先生は国の行政委員会や諮問会議しもんなどでもお仕事をなさっています。けっころストレスが溜まっていらっしゃるよう……。……。

長谷川 本当にそう！　これはどこの国の政治でも同じなのかもしれませんが、政治家や役人の考え方は科学からひじょうに遠いと思いますよ。

山 岸 分かります、分かります。私の用語で言うところ「心でつかち」というやつですね。すべての社会問題の原因を客観的、科学的に捉えるのではなくて、安易に「心」に求める傾向はますます広がっているように思います。

長谷川 何でもお説教すれば問題解決するというのはのだったら政治なんか要りません。スローガンを町中に貼っておけばいいということですからね。スローガンや精神運動ではどうにもならないからこそ政治の出番なのに困ったことです。

山 岸 そもそも社会科学は、個人レベルの行動や心がけをいくら変えても社会が変わるといってわけではないというところから出発しています。

たとえば誰だって戦争で死ぬのはいやでしょう。家族や知り合いが戦争で死ぬのを喜ぶ人はいません。平和の願いは万人に共通なのに、なぜ戦争が起きるのか。一人一人の気持ちや心がけとは関係なく戦争は起きます。

あるいは誰だって不景気はいやです。戦争を望む人はひよつとしていられるかもしれませんが、わざと不景気にしてやろうとする人はめったにいませんよね。でも、それでも好況は永遠には続かず、やがて不況がやってくる。それはいったいなぜなのか。

その仕組みというかメカニズムを解明しようとするから、経済学や社会学などを総称して社会

科学いと言うんです。

長谷川 ことに近年では、社会科学と自然科学とがたがいに接近してきて、その共同作業の中でさまざまな社会現象に対する理解が飛躍的に深まっています。

山 岸 だからこそ、私と長谷川先生との間に対談も成り立つわけですが、こうした状況は本当にこの数十年で急速に生まれたものと言っている。

長谷川 まさに最先端の分野だと言っていると思いますね。

山 岸 なのに、その知見がなかなか広まっていかない。

長谷川 本当にそう！ 中でも私が最近、いちばん憤っているのは少子化問題です。政治家やお役人たちの考える「少子化対策」のお粗末なこと、お粗末なこと。

少子化問題を進化から考える

山 岸 たしかに少子化問題については「心でっかち」な議論が横行していますね。「女性が働きたがるものだから子どもが生まれないんだ」とか「家族の素晴らしさを若者に教えないといけない」といった話ばかり。要するにお説教でしかない。お説教では社会問題は解決できないですよ。

長谷川 私から言わせれば、少子化問題に関する議論でいちばん欠けているのは生物学的観点、

生態学的観点です。

山岸 それは面白い指摘ですね。具体的にはどうということなんでしょうか。

長谷川 動物のライフサイクルをエネルギー消費という観点から考えると、大きく三つに分けられます。第一は自分自身の身体を維持したり、成長するためのエネルギー、第二は配偶者を見つ

けるためのエネルギー、そして第三は繁殖のためのエネルギー。

一生涯に使えるエネルギーの総量は限られているわけですから、どうしたってそのエネルギーの配分を考えなければいけません。

山岸 いわゆるトレード・オフの関係にあるわけですね。

長谷川 このほかに重要なのは寿命ですね。人生の限られた時間をどれだけ子育てに使うか、自分自身のために使うかも戦略として重要になってきます。

山岸 たしかに寿命が短いと、子育てに時間を費やすことは不可能ですね。魚や昆虫の多くは卵は産みっぱなしで、「育児」はやらない。

長谷川 だから彼らの時間配分は自分への投資と配偶者選びがメインで、卵を産んだらすぐに死んでしまうわけ。その代わりに、たくさんの卵を産む。そこに残りのエネルギーを傾注するわけ

昆虫や魚類——たくさん卵は産むが、育児はしない

自己投資 =生命を維持するための努力	配偶者選択	子育て投資 =タラは 200 万個の卵を産む
------------------------------	--------------	----------------------------------

哺乳類——少なく産んで、子育てをする

自己投資	配偶者選択	子育て =卵で産まずに、体内で育ててから産む。生まれた後も世話をする
-------------	--------------	--

注：上下のグラフはあくまでも比率を表わした、相対的なものである

です。そうすれば、たとえ外敵に食われたとしても何パーセントかは生き延びる。

たとえばタラという魚の卵巣はみなさんよくご存じのようにタラコと言いますが、一体のタラの卵巣には二〇〇万個の卵が詰まっています。二〇〇万個産んで最終的に全部が育ったら、あつという間に海はタラだらけになるんですが、そうはならない。そのほとんどは成長できずに死んだり、あるいは他の魚などのエサになっている。でも、タラにとってはそのうちの二個だけがちゃんと成長すればいい。

山 岸 合計出生率が二以上でありさえすれば、タラの数は減らないわけですね。

なぜ哺乳類は「子育て」をするのか

長谷川 これに対して哺乳類はその名のとおり、子どもに乳を与えて育てるわけですから、エネルギーも時間も繁殖に多く使うという戦略を採っています。魚類や昆虫のように一回でたくさんの子ども（卵）を産むのではなくて、限られた子どもに集中的に資源（食糧）を与えるわけですね。

こうした戦略の違いはなぜ生まれるかというところ、その生物の置かれた環境が関係していると考えられます。それは簡単に言えば、子どもが育つうえで、どれだけ競争が厳しいかということですね。生存環境が飽和状態であれば、自分の子どもが無事に成長するために親はできるかぎりの資源を与えないといけません。

山 岸 身体を大きくして、他の個体に負けないようにしないといけないわけですね。

長谷川 そのためには子どもの数を限定して、一人の子になるべく資源を割けるようにしないと
いけませんし、時間をかけて育てる必要があります。哺乳類が母親の胎内で子どもをある程度大
きくしてから出産するのもそのためですね。

これに対して、生存環境が飽和していない場所ではそこまでの手間や時間をかけなくてもいい
から、子どもは産みっぱなしでいい。その代わりに、生き残りの確率を上げるためにたくさん
の子を一度に作る——それが昆虫だったり、魚だったりするわけですね。

山 岸 たしかに海洋で暮らす魚にとっては環境が飽和するということは考えられませんか。広
大な空間があるわけだから縄張り争いなんかも必要ない。

長谷川 ここまでの説明ですでお分かりのとおり、ヒトは少なく産んで、それぞれの子に資源
を集中投下するという戦略を採っています。ヒトに限らず霊長類は哺乳類の中でも子育ての期間
は長いのですが、ヒトはその中でもとびつきり長い。たとえば、チンパンジーのメスは一〇歳く
らいになれば妊娠・出産できるようになる。つまり、一〇歳で成人するわけですが、ヒトはそう
ではありません。それよりもさらに数年先の一五歳前後にならないと成人しないわけですね。
山 岸 人間の子育てはそれだけ他の動物よりも資源と時間を必要とするということですね。

本来ならばヒトの妊娠期間は三年！

長谷川　しかもヒトの場合、他の霊長類ならば未熟児と言ってもいい段階で出産します。ヒトは「十月十日^{とつきとおか}」、つまり二八〇日前後で生まれてくるのですが、他の霊長類との比較で言うると、本当は三年くらい妊娠していないといけないんです。

山　岸　そんなに！　でも考えたらチンパンジーの赤ちゃんなんかは人間と違って、生まれたときからお母さんにしがみつくこともできますものね。そういうことができるように産むには人間の場合、三年妊娠していなければいけないんだ。

長谷川　しかし、それはあくまでも計算上のことで、実際にはそんなに長くお腹の中には置いておけない。というのも、ヒトの場合、チンパンジーなどより頭が大きいのでお腹の中で育ちすぎると産道を通らなくなってしまう。だから、小さい、未熟児のうちに産まないとならないんです。

山　岸　脳が発達したせいで人間は早産になってしまった。言われてみれば人間の子どもっているのは三歳くらいになってようやく、チンパンジーの赤ちゃん並みになるのかもしれないね。

長谷川　そしてチンパンジーが一〇歳前後で生殖可能になるのに、ヒトは最低でもそれから五年はかかる。さらに「親に頼らず、自分で食糧を調達できるようにする」という基準で考えると、先進国の場合、今や子育て期間は二〇年以上にもなっていますよね。

山岸 日本では大学や専門学校を出るのが今や普通になっていますからね。

長谷川 ライフサイクルにおけるエネルギーと時間の配分という観点から考えると、ヒトの場合、子育てに過大なエネルギーと時間を割かなければいけない。

山岸 人が一生のうちに使える時間とエネルギーは有限ですから、そんな手間のかかる子育てにかまけていたら、自分自身の生命維持がおろそかになってしまいますね。子どもを二人、三人と同時に育てるなんてとても無理です。

長谷川 かといって、最初の子どもが成人するまで待っていたら、生殖年齢を超えてしまいます。山岸 なるほど。「なのに、人類が存続しているのはなぜなのか」ということですね。

ヒトは共同繁殖の動物

長谷川 それを解決するためにヒトは「共同繁殖」をするようになったんです。

山岸 共同繁殖という言葉は初めて聞きました。

長谷川 さつきも言ったように魚類や昆虫などは基本的に「産みっぱなし」です。つまり、いわゆる育児はしない。これに対して鳥類や哺乳類は生まれてから一人前になるまでは親が育てます。その場合、育児をするのがメス・オスどちらかの親だけの場合もあれば、両方の親と一緒に育児をする場合もありますが、基本は親が育児をやる。

山岸 カッコウは托卵たくらんといって他の鳥の巣に自分の卵を産み付けるという話を聞きますが、それだって「親」が育てるのには変わりませんよね。その場合は「義理の親」ということになるんじゃないでしょうか。

長谷川 それが人間の場合、育児の担い手は親だけではない。これは人類の大きな特徴、他の動物と人間とを区別する最大の特徴の一つだと言っても過言ではありません。

山岸 それが「共同繁殖」ということなんですね。

長谷川 その象徴が「ヒトにはおばあさんがいる」という事実です。

山岸 おばあさん！ それは面白い。

「おばあさん」がいるのは人間だけ？

長谷川 おばあさんを「繁殖期を終えたメス」と定義するならば、実はヒト以外の動物で、おばあさんがいる例は確認されていません。ひよつとしたらクジラにはおばあさんがいるのではないかとも思われますが、繁殖能力がなくなったメスはその時点で寿命を迎えるのが通例です。

山岸 たしかに進化という観点からすると、次の世代に自分の遺伝子を受け渡すのが生物の最大の使命ですから、その仕事が終わったら生きていても意味がない。

長谷川 もちろん繁殖能力を失ったオスも寿命を迎えるわけですが、オスは繁殖可能年齢がメス



ヒトにとって「おばあさん」の存在は必要不可欠なもの

よりも長く、その間、ずっと子どもを作っているわけです。

山岸 そうすると、オスの場合、生きている間に「子どもの子ども」、つまり孫が生まれる可能性はメスよりずっとありますね。

長谷川 ところが人間の女性の場合、閉経後の女性は自分の子どもを作る可能性はゼロなのにさらに長生きして、孫、ことによつたら曾孫ひまごの顔を見ることができ。つまり、おばあさんになれるわけです。

山岸 たしかに、そう考えると「おばあさん」がいるというのは実に特殊ですね。

長谷川 ではなぜヒトだけに「おばあさん」がいるのか。それはヒトの子育てはあまりに大変だからです。

ヒトの先祖は今から二百数十万年ほど前にアフリカで生まれたと言われていますが、彼らは何らかの理由があつて熱帯雨林の中では暮らせなくなった。その理由については諸説ありますが、食が豊富で、外敵からも比較的 안전한森林の中で暮らせなくなったことで、ヒトはサバイバルのために脳を発達させていきます。

山岸 聖書では、知恵の実を食べたからアダムとイブは楽園

追放されたわけだけれども、実際の進化では熱帯雨林という楽園にいられなくなったから知恵を発達させた。順序が逆なんですね。

長谷川 預言者モーゼがイスラエルの民を引き連れてエジプトから脱出した物語を「出エジプト」と言いますが、それになぞらえてヒトが森林から出て、ついにはアフリカ大陸の外に出たことを「出アフリカ」と呼ぶ人もいますね。

それはさておき、それ以来、ヒトの脳はどんどん大きくなっていきます。初期の人類であるアウストラロピテクスの脳の容量はおよそ四〇〇立方センチだったのが、ホモ・サピエンスになるとそれが一四〇〇立方センチにもなりました。一方で身体のサイズも大きくなってきているのですが、それを考慮に入れても今の私たちの脳は身体に比してたいへん大きいと言えます。

このことがヒトの育児に大きな影響を与えました。というのも、脳の容量が大きいため赤ちゃんと産道を通りにくくなった。しかも人間は直立歩行をしたことよって四足歩行のときとは違って産道が曲がっています。そのためにチンパンジーやゴリラと比べて、ずっと出産が困難になったわけです。

そこで先ほども触れたとおり、ヒトは未熟児同然の時期に赤ん坊を出産することになったし、また、その子どもが自立するためにはさまざまな学習もしないといけない。

山岸 脳が大きくなったのはまさに生き延びるためですから、そこに知識や経験を蓄えないといけないわけですね。

長谷川 だからこそヒトは文明をも作り出したわけですが、しかし、成体になるまでに一五年は軽くかかるというのはやっぱり異常なことです。

山 岸 そこで「おばあさん」が必要になったと。

母性神話のウソ

長谷川 そもそもヒトは母親だけでは育児はとてできない動物なんですね。実際、古今東西の社会を調べてみても、子育ては母親だけがやるんだという社会はどこにもありません。

山 岸 育児放棄とか児童虐待の問題で、よく「母性が足りない」とか言う人たちがいますが、そもそも母性頼みでは子どもは育たない。

長谷川 ヒトはそこで「共同で子どもを育てる」ことにした。母親の時間とエネルギーだけではとても無理なので、配偶者、家族、さらには自分の属している集団メンバーからもサポートを得て、繁殖するという戦略を採ったというわけです。

山 岸 「ネコの手も借りたい」という感じですね。そこで、子育てが終わった母親、つまりおばあさんにも長生きしてもらって手伝ってもらおうということになった。

長谷川 だから「母性が足りない」とかいうお説教は何の意味もない。ヒトの子育ては「母性だけではまったく足りない」のですから。

でも、こんなこと、別に進化のことまで研究しなくても、ちよつと考えれば分かるはずですよ。なのに、役人や政治家とききたら何でもお説教や心構えで解決しようとする。だから私はいつも腹を立ててばっかりいるんです。

山 岸 長谷川先生は国のさまざまな行政委員会に出ておられるから、本当にそういう言説に接することが多いのでしようねえ。

統計を見ずに「心」のせいにしたがる人々

長谷川 そうした会議では毎回、山のように資料を渡されるのだけれども、肝心の議論になるとそういう印象論が平気でまかり通る。話がどんどん逸れちゃうけれども、たとえば、「土曜、日曜になるとバイク事故が増えている。これは週末になると気が緩むせいではないか」なんて話になるわけ。

山 岸 ちゃんと統計を見れば分かるのに、すぐに心のせいにしちやう。それは要するにベースラインの問題でしょう。

長谷川 週末と平日で、走っているバイクの台数に違いがないかといった基本的なことを考えない。「レジャーに行くから浮ついてるんだ」という精神論になっちゃう。

それだけじゃなくて、「大型バイクの事故は統計上、四〇代、五〇代に多い。中年になると運

転に慣れて気が緩んでいるに違いない」なんて話になっちゃうわけ。

山岸 何でも心のせいにしたいわけですね。

長谷川 大型バイクっていうのは排気量も多くて、それだけ価格も高いバイクということでしょう？ そんなバイクに乗れるのは経済的余裕のある中年層ですから、事故の数だけを見ていたらどうしても四〇代、五〇代が多くなるに決まっています。そこで「ちゃんと年代別の事故発生率を見たらいかですか」と言ったら、案の定、最も事故発生率の高いのは二〇代の若者、三〇代、四〇代になると下がってきて、五〇代でちょっと上がる。現実はそのものなのに、「中高年のバイクは規制しないとイケない」とか言っているわけですよ。

山岸 統計は「心でつかち」にならないためのツールで、上手に使えばいろんなことが分かるのに、最初から心のせいにしてしまう。それでは何のために統計を取っているのか分かりませぬね。

「心」で社会を解釈してはいけない

長谷川 そういえば私が一九九〇年に初めて山岸先生を研究会にお招きしたとき、先生が「社会問題は個々の『心』が原因ではない」ことの例として挙げられたのは、一九八〇年代後半に離婚率が低下した問題でした。

山岸 一九八三年から八八年にかけて、日本の離婚率は一気に一七%ほど下がったのですが、その理由は何だろうと思いますかと問うと、そこで出てくる答えは、

「バブルの絶頂期で景気がよく、経済的な不満がないから離婚しなくなった」

「戦後の民主的な教育を受けた世代は夫婦関係が平等になり、友達のような夫婦が多くなったからだ」

「女性の自立が進んで、昔ならイヤイヤ結婚していたタイプの女性が結婚しなくなった。離婚リスクの高い人がそもそも結婚しなくなったから、離婚が減った」

と、さまざまなのですが、これらに共通しているのは「心」なんですよ。

長谷川 つまり、この時期に人々の心が変わったことが原因なんだという解釈ですね。

山岸 でも、これらの説明はどれも間違いなんです。

では正解は何かというと、これは単純なことで、いわゆる離婚適齢期の人の数がこの時代に減ったのです。統計的に見ると、そもそも離婚が多いのは結婚後だいたい五年くらいまでのカップルで、それ以後は減る。

長谷川 この相手とはうまく行かないというのが分かるのにはそんなに時間がかかりませんものね。だから、たいていの離婚は結婚五年以内に起きる。それまで我慢できたら、その後も我慢できるとも言えますね。

山岸 なぜ離婚適齢期の人が減ったかというところ、それは団塊の世代と関係があります。いわゆる

る団塊の世代というのは一九四七年から四九年生まれの世代を指しますが、その人たちが結婚したのははだいたい一九七〇年から八〇年にかけてのことで、だから七〇年代後半から八〇年代初頭にかけては離婚するカップルの数が激増し、離婚率も上昇した。

長谷川 その離婚ラッシュが落ち着いたのは一九八三年以後。だから離婚率も減った。それだけのことなんだけれども、事実関係を確かめるよりも先に心のほうに原因を求めてしまうわけですね。もう本当にそういうことの連続で、いつも私はお役所の会議でうんざりしているんです。

山 岸 心から同情申し上げます。

出産立会人はなぜ必要か

長谷川 えっと、そもそも何の話をしていたのでしたっけ。ああ、そうそう、ヒトにはなぜおばあさんがいるのかということを書いていたんでしたね。

山 岸 共同繁殖の話です。

長谷川 何しろ二〇歳になるまでひとり立ちできないような子どもの面倒を見て、しかも、生活が成り立たせるなんて、これは母親だけではとても無理。と言っても、では父親がそこで協力をすれば育児ができるかというのと、実はそれだけでもダメなんです。

山 岸 そこでおばあさんの出番になるわけですね。

長谷川 正確には、おばあさんの助けも要る。

山 岸 なるほど、おばあさんだけではまだ足りない。

長谷川 「人間は社会的動物である」とよく言われますが、それは単にみんなで協力し合わないと食べていけないということだけではなくて、子育てにおいても言えることなんです。

山 岸 つまり、ヒトは社会の力を借りて子どもを育てる動物である。

長谷川 逆に言うと、他者からの力添えを期待できなければ、子どもを作ろうという話にならない。

これには面白いデータがあるんですよ。

一九七〇年代から八〇年代にかけて、中米のグアテマラで行なわれた研究なのですが、グアテマラではドゥーラという習慣があります。ドゥーラとは分娩する産婦さんに付き添う人のことを指しますが、これはお産婆さんとも違います。それどころか産婦の家族や縁者でなくてもいい。極端な話、まったく初対面の人であつてもかまわないのね。

ではそのドゥーラとは何をするかというと、産婦と一緒にいて、話しかけ、彼女を激励し、安心させる——言ってみればそれだけなのですが、研究者たちはグアテマラの病院で分娩した初産の女性を対象に、ドゥーラがいる場合といない場合でお母さんと赤ちゃんの関係がどう違うかを調べようと考えました。

もちろん病院で出産するわけですから、ドゥーラがいてもいなくても、お医者さんや看護婦さ

んのケアを受けるのは同じです。ただ、お医者さんや看護婦さんは他の仕事も掛け持ちをしているわけですから、産婦さんとずっと話をしているわけではない。言い換えるならば、そこには社会的なつながりは存在しない。一方、ドゥーラは産婦さんとずっと一緒ですから、そこでは人間同士のつながり、関係が生まれます。

さて、この研究者たちが発見したのは、まずドゥーラがいる場合といない場合とでは正常分娩の発生率がぜんぜん違うということでした。彼らは正常分娩の例で比較検討しようと考えたのですが、「ドゥーラあり」の場合、二〇〇例の正常分娩のサンプルを得るために三三三の分娩に立ち会ったのですが、「ドゥーラなし」の場合、たった二〇〇例のサンプルを得るのに一〇三例もの分娩に立ち会うことになった。

山 岸 つまり、ドゥーラがいないと難産が増えるというわけですか。そこまで違うとは驚きです。すね。

長谷川 さらに正常分娩のケースでも両者では分娩の平均時間も倍以上、違いました。「ドゥーラあり」のほうは平均八・八時間だったのに対し、「ドゥーラなし」だと一九・三時間だったのです。

当初の研究目的であった母親と新生児の関係についてもやはり違いがありました。ドゥーラの付き添いのなかった産婦のほうが生児との接触も少なく、母親の不安感も強かった。

山 岸 たいへん興味深い話ですが、これをどういうふうに解釈すべきなんでしょうか。

長谷川 出産のプロセスは子宮が収縮することによって進むわけですが、産婦がストレスにさらされているとアドレナリンの分泌が促され、それが子宮の収縮を抑制してしまうのだからと考えるられています。

つまり、ヒトの場合、たとえ分娩が近づいていても「社会的なサポートが得られないようなところでは産まない」という生理学的メカニズムが働いているんでしょうね。

山岸 たしかに一人っきりのところで出産したら、それこそお母さんも赤ちゃんも生命の危機にさらされますね。

長谷川 これが犬やネコだったらそんなことはありませんよね。むしろ、彼らは人目につかない、軒下のきしたとかなどで産もうとするし、付き添いなどなくてもちゃんと産まれるわけです。

狩猟採集民の中には、ニューギニアの人々など、実際に産むときには産婦さんが一人だけになる習慣のところもあります。でも、この場合も本当に一人きりかというところ、周囲のサポートがあること自体は確実なのですよ。その保障がない現代の社会では、実際にその場に付き添ってくれている人がいるかどうかはとても重要なのでしょう。

ヒトの育児は社会ぐるみで行なうもの

山岸 育児だけでなく、出産の段階からヒトは社会的サポートを必要としているというわけな

んですね。

長谷川 父親が育児に参加するかどうかは民族によって違いがありますが、しかし、どの民族でも母親だけが単独で育てるということはありません。子どもが成人するにはその家族やその社会の構成員たちのサポートがかならずある。いや、サポートがないと成長できないわけです。

山岸 ところが今の日本は核家族になって、親族からのサポートはあまり期待できません。また個人主義的なライフスタイルが普及したので、コミュニティとのつながりが今や薄くなっている。昔だったら、困ったときには隣近所に助けを求めるときには隣近所に助けを求めるときには隣近所に住んでいるのか分からないような都市生活では無理というものです。

それなのに「子育ては母親の仕事」などという、誤った考えが力を持っている。ことに日本はシングルマザーに厳しい社会で、母子家庭は経済的困窮に陥りがちなものだけれども、そこで生活保護を受けたりするとかえって非難されたりする。これでは少子化になってもしょうがない。

長谷川 核家族、大家族で育てるといふ状況も概念も壊れたなら、シングルマザーだろうが何だろうが、子どもを育ててくれるならば大歓迎にならないといけなはず。なのに、「それはイヤだ」というのでは理屈になっていません。政府は最近になって、少子化対策として三世代同居を推進するのだと言っていますが、これも要するに「育児は家族単位で行なえ。社会的サポートには期待するな」という話で、かつての姿に戻れと言っているだけのことですよね。

でも、そもそもそれが不可能だからこんな状況になっているわけで、これでは何の対策にもな

っていません。

山岸 それも「心がけ」で解決しようというアプローチですね。なぜ今の時代、核家族が増えているのか、三世代同居がすたれたのかという原因すらきちんと考えなくて、「家族同士で助け合うのが美德だ」といったスローガンで解決しようとする。それでは政治とは言えません。

そこで長谷川先生にお聞きしたいんですが、この少子化問題の「解決策」ってあるんでしょうか？ 少子化は日本だけでなく、世界中で起きている問題、いや、現象ですよ。

少子化現象はなぜ起きるか

長谷川 今までの話だけならば、「ヒトは共同繁殖だったんだから、家族やコミュニティ総出で子育てをしよう」という結論が思いつくわけですが、実際はそんなに簡単な話ではありませんね。かりにそういう体制を作ったところで女性たちが子どもを作るかという疑問です。

山岸 私の考えを先に言ってしまうと、そもそも昔も、人間は子どもを作りたくて作ってきたわけじゃないと思うんです。

というのは、子どもができるのはセックスをした結果であって、そのセックスはかならずしも子作りのためにやっているわけではない。むしろ、人間がセックスするのは主に快樂のためでしょう。

長谷川 好きな相手とセックスをして、その結果、子どもができちゃう。で、「せっつかくだから子どもたちを労働力にしよう」という感じで人類が長いこと来たのは間違いないでしょうね。

山 岸 望んでも赤ちゃんができないというケースもたくさんあるし、そのために不妊治療をしている方はたくさんおられます。しかし、それはどちらかというところと最近のことで、それまではそこまで計画的にセックスしているわけではありませんよね。そういう意味では妊娠、出産というのは本来、意図せざることだと思うんです。

長谷川 しかも今は避妊法がいくつもあるわけですからね。

山 岸 もちろん実際に妊娠し、出産すると脳の中のスイッチが入って、いわゆる母性本能が働き出すのだとは思いますが。ただ、それは妊娠した後の話ですよ。子どもを作りたいからヒトはセックスするわけではない。人間にとってセックスはそれ自体が快楽ですから、子作りとは実はつながっていない。そう考えると、私は世界中で少子化現象が起きているのは当然の結果だと思います。

エネルギー配分から人生を考える

長谷川 なぜヒトは子どもを作らなくなったかということについて、こういう説明もできると思っています。

先ほどもお話ししたように、エネルギーの配分という観点から考えると、ヒトの一生はあまりにも子育てに重点が置かれているので、現代のようにそれぞれの人間が「自分の生き甲斐を追求したい」と思うようになれば、どうしても子育てにエネルギーを割けなくなるんです。

山岸 それは第一の「成長のためのエネルギー」に分類される話ですね。

長谷川 自分自身に投資して、さらに活動の場を広げていける可能性が開けたわけですね。ことに女性は、かつては家庭に縛り付けられて、自分への投資よりも家庭の維持や子育てにエネルギーを傾注せざるをえなかったわけですが、近代社会になって女性の活躍の場が増え、経済も発展して、女性が自活できるようになれば、当然、この成長のためのエネルギーに多くのリソースを投じる傾向が加速していきます。

さらにそれと関連する形で、第二の「配偶者を探すためのエネルギー」という部分も今では比重を増していますよね。昔のように親が決めた相手と結婚する時代ではない。男も女も、自分を磨いて、理想の結婚相手を探したい、そのためには多少、結婚時期が遅れてもかまわないと考えています。

山岸 そうして考えていくと、第三の「繁殖のためのエネルギー」はますます減らさざるをえませんか。

長谷川 これを補填しようとするのは並大抵なみたいていなことではありません。さつきも言ったように日本政府は「三世代同居」を進めていますが、かりにこの施策が成功して三世代同居が

ヒトの一生のエネルギー分配

短命で、子だくさんの時代

自己投資 =日々の生活に追われる	配偶者選択 =身近なところや、お見合いで結婚相手を見つける	子育て投資 =できるだけたくさんの子どもを作って、自分の遺伝子を後代に伝える
----------------------------	---	--

豊かな時代(少子化時代)

自己投資 =生き甲斐探し、生涯学習、趣味やレジャーを通じての自己実現など	配偶者選択 =結婚は自分自身の幸福のためなので、婚活に励む	子育て =出産年齢が高くなる。少子化
--	---	------------------------------

増えたところで、はたして少子化が解決できるかどうか怪しいですね。

山岸 おばあさんの助けがあればどうにかなるというわけではない。

長谷川 もちろん、助けがないよりはあったほうが確実にいいです。でも、女性の自己投資が増大すれば、結婚年齢もどんどん高齢化していきます。そうになると一生涯に産める子どもの数は限られてきます。
山岸 さらに付け加えると、現代人にとっての育児は一種の娯楽になっていると思うんです。

昔だと子どもは「生まれたからしょうがない」という感じで育てられた部分があるし、またそれと同時に「老後の面倒を見てもらうため」という側面もあったと思うのですが、現代の先進国ではそうではなくなった。

少子化になった分、一人の子どもにかかる手間やコストは以前よりもとても大きくなった。言い方は

悪いけれども、子育てとペットを飼うこととそんなに感覚は違わないと思うんです。

ペット化する子どもたち

長谷川 少子化の原因として、よく言われるのが収入問題ですね。つまり、最近は格差が広がっているので子育てをしたくても、家計の面でそれを躊躇ちゅうちよしてしまうというわけですが、どうもそれは違うのではないかと思います。収入が増えたとしたら、三人、四人と子どもを作るかということ、そういうことにはならない。

山岸 むしろ貧しい時代のほうが子どもが多い。避妊方法がなかったということもあるし、子どもは労働力にもなるし、老後の面倒も見てくれるのでむしろ多いほうがよかったとも言えます。だから少子化と所得格差はそんなに関係はない。私はそれは「子どものペット化」のせいだと思わぬですね。

つまり、昔のように子どもを労働力や稼ぎ手と見るのではなくて、かわいい服を着せ、ちゃんとした教育を与え、一緒に旅行やレジャーもして、子どもと楽しい人生を過ごしたい。そういう人にとっては、そんなにたくさんの子どもは要らないんだらうと思います。

長谷川 ではやはり山岸先生は「少子化は解決できない」というお考えですか。

山岸 基本的にはむずかしいだらうと思います。さっきの話の関連で言うと、人間は本来、

子どもを産みたい、育てたいという「本能」を持っているわけではありません。でも、実際に生まれてみると、たいていの場合、子どもがかわいいと思うスイッチが入るわけです。そのスイッチが入りやすくなるようにすることはできるんじゃないですかね。

長谷川 それにはどうしたらいいと思いますか。

山 岸 たとえば、一〇代の後半とか二〇代のころ、つまり生殖年齢に達したころに小さな赤ちゃんや子どもと接触する機会を作るとけっこう刺激になるんじゃないかと思うんですね。

長谷川 たしかに、今の若者は核家族の中で育っているし、都会生活では他人の家の赤ちゃんに接する機会もあまりありませんね。昔は本格的な子守りとはいかないまでも、ご近所や親戚の赤ちゃんを抱いてあやしたりすることはよくありましたよね。

山 岸 長谷川先生はどうお考えですか。

長谷川 自分自身の経験や他の人の話からすると、人間は男女ともに、ある年齢になると、とても子どもが欲しくなるということはあるのだと思います。ただ、そうした感情が素直に現実につながるように社会ではない。目前にある、他の要求を満たすことのほうが人間にとって重要なのです。社会のあり方のおおざっぱな傾向がこうである限り、少子化傾向そのものは解決ができません。だろうと私も思っています。

でも、では政治が無力かというところも思わない。このままでは少子化は避けられないと分かっていたらやれることは他にもたくさんあるんじゃないかと思うのです。

山岸　つまり、少子化を前提にした制度設計、社会作りをするということですね。

長谷川　ところが、今はそういう現実把握がないまま、「少子化は大変だ、大変だ」と無駄なことばかりをやっている。そこを脱却することが何よりも先決だと思います。なのに、政治家も役人も若者たちにお説教してどうにかしようと考えている。そこに私は怒りの炎を燃やしているわけですよ。

スローガンよりも制度設計を

長谷川　何でも「昔がいい」と言うつもりはありませんが、かつての官僚たちはちゃんとそこが分かっていたと思います。つまりスローガンではなくて、制度によって社会的な目標を達成していくこうとした。

たとえば一九五〇年代から六〇年代の日本では、今とは正反対に「どうやって人口抑制をしていくか」ということが至上命題になっていました。その当時は出生率が四以上もあつたので、そのまま行くと人口爆発を起こしてしまおう。とにかく出生率を下げないといけませんでした。

そこで当時の官僚たちが考えついたのは二つ。

一つは移民を積極的に奨励すること。私の子ども時代の友だちにも家族みんなでブラジルに渡っていった人がいましたが、当時は移民する人たちに対して優遇措置をしたんですね。だから、

農家の次男三男などで、このままでは喰っていけないという人たちが移民を志願したんです。

山岸 当時は、まさか日本が世界第二位の経済大国になるとは誰も思わなかったでしょうね。今でこそ「なぜわざわざブラジルまで」と思うのですが、当時はブラジルのほうが将来性があると思われた。

長谷川 この移民のほかに行なわれたのが2DKの普及です。

山岸 いわゆる団地スタイルですね。

長谷川 当時の2DKは今よりもずっと面積も小さかったのですが、長屋や一軒家ではなく、こうした集合住宅に住み、冷蔵庫や洗濯機、掃除機などの電化製品を備えた暮らしを送るのが「文明的」なのだと言われ、それが大成功を収めました。

その結果、出生率はあつという間に四から二へと下がったんです。

山岸 なるほど団地サイズの家ではたくさんの子どもを育てられませんから、どうしたって子ども数は減りますよね。

長谷川 子どもを作るなど命令したり、号令したりするのではなくて、そうやって核家族化して暮らすことがモダンなことなんだという風潮を作っただけではなく、その家族が暮らす場として公団住宅を実際に作ってみせた。この結果、民間でも似たような小さなアパートがたくさん作られて、そこに住む人たちがどんどん増えた。世界でもこれほど成功した人口抑制策はないと思いますね。

山 岸 大事なのは心がけを説くのではなくて、制度設計をすることなのですが、それが今の日本ではたいへんおろそかになっているんです。

「進化」していない心

長谷川 しかも、そこで絶対に忘れてはいけないのがヒトには進化上の制約があるということですね。制度が大事だといっても、どんな制度でも作れるわけではない。ヒトとしての能力では維持することができない制度というものもあります。

山 岸 その一つが社会主義体制だったとも言えますね。

長谷川 マルクスは人間はどんなものにも作り替えることができると思っただけです。いわゆる下部構造、つまり、経済や社会の制度を変えれば人間の生き方も価値観も変わると無邪気に信じていたんでしょね。でも、それは翼のない人間に空を飛べと言うようなものでした。

山 岸 人間の心には無限の可能性があつて、そこには何の制限もないのだと考えたのはマルクスだけではなかった。近代合理主義そのものが、そういう前提の上に作られたものであつたと言っても過言ではありません。

長谷川 あくまでも脳とはヒトという種が生き延びるうえで発達した臓器であつて、万能の思考マシン、計算マシンではありません。たしかにヒトの脳は複雑にして巧妙に作り上げられたもの

ではあるのですが、その巧妙さはヒトの進化史において重要だった問題解決のためのものだった。そのころあまり重要ではなかった問題についての解決能力は低いというデコボコがあります。論理の理解という点に限れば無限の可能性はあるかもしれないけれども、私たちの感情や情動は数十万年前からそうは変わっていないんですね。

山岸　でも、それがなかなか分かってもらえないんですね。人間の心の働きなんか、古今東西、そんなに変わらないですよ。

長谷川　だからこそ、私たちは古典を読んで、二〇〇〇年以上前の人々、しかも、地理的にも遠く離れたところに生きた人々に共感できるわけですけれどもね。

山岸　今と昔で心のあり方が違っていたら、あるいは東と西で心のあり方が違っていたら、相互理解なんてありえないですよ。

長谷川　でも、「私たちとはまったく違う、心の美しい人々がどこかにいる」とか思いたくなるものなんです。それが例のマーガレット・ミードの話。

山岸　そうそう、あれはいい例ですね。ではそれについてちょっと語りましょうか。

サバシナが産み出した「心」

第2章

「南海に浮かぶ桃源郷」

長谷川 マーガレット・ミードはアメリカの文化人類学者で、『菊と刀』で日本人に有名な文化人類学者ルース・ベネディクトとは同じフランツ・ボアズの門下生です。

そのミードが一九二八年に発表した『サモアの思春期』という本は欧米社会に大変なセンセーションを巻き起こします。

サモアというのは南太平洋にある島で、当時は国際連盟の信託統治下にあつたのですが、一九二五年、当時、二三歳だつたマーガレット・ミードはこの島に住むポリネシア系の住民たちの思春期のようすを調べるように指導教官だつたコロンビア大学のフランツ・ボアズ教授から言われてフィールドワークに出かけます。

山 岸 なぜ思春期の問題を調べにわざわざサモアに行つたかというのと、これは当時のアメリカで思春期の若者たちの犯罪や自殺が社会問題になつていたことが背景にあつたんだと思います。要するに子どもたちが荒れるのは文明の悪影響のせいだ、「未開」のサモアの若者たちは違ふんじゃないかという仮説があつたんでしょうね。

長谷川 その頃のアメリカは好景気に沸いていました。大恐慌が起きる数年前ですから、アメリカが世界で最も豊かな国になつた時代です。若者というのは親の言うことを聞かなかつたり、大

人たちに反抗したりするものですが、現状に満足している大人たちからすると「なぜ近ごろの若者たちは親の言うことを聞かないんだ」という感じがあったのでしよう。

山岸 「今どきの若者は」という言葉は、いつの時代でも年寄りが思うことなんですからね。

そんな時代の雰囲気の中、サモアから帰ってきたマーガレット・ミードは驚くべきレポートを発表するんです。

それは何と、「サモアの若者たちには欧米の若者のような思春期の葛藤も悩みもない」ということでした。

そもそもサモアの人々は大人も子どももみんな心が穏やかで、嫉妬や憎悪に悩まされることもなく、誰も生活にあくせくすることももない。セックスは遊戯の一種と見なされ、パートナー以外とセックスをしてももめ事が起きることもない、というわけです。

長谷川 サモアでは若者が大人と衝突することもないし、大人から抑圧されることもない。だから青少年の犯罪もなければ、自殺もないというのが『サモアの思春期』の主旨でした。



マーガレット・ミードの「権威」は今なお健在である

まさに「南海に浮かぶ桃源郷」という話ですが、常識で考えたらこんな天国のようなところが実際にあるはずがありません。ところが、このミードのレポートはそれから半世紀以上にわたって真実だと思われ、マーガレット・ミードは文化人類学の世界においては伝説的な存在になりました。

山岸 いや、今でも彼女を偉大な学者だと思っている人は少なくないでしょう。文化人類学の世界ではいまだに彼女は偉人ですし、教科書にも彼女の名前は載っています。

なぜミードは「神話」をでっち上げたのか

長谷川 実はマーガレット・ミードはこの他にもセンセーショナルなレポートを発表しています。彼女が一九三五年に発表した『三つの原始的社会における性と気質』という論文では、ニューギニアにも欧米社会とはまったく違う社会があると報告しています。中でもチャンブリ族の社会では、女性が社会の主導権を握っていて、男性は女性に服従している社会なのだというわけですね。

山岸 古代ギリシヤに「アマゾネス」伝説がありましたね、それにそっくりですね。

長谷川 このサモアの話も、ニューギニアの話もどうも信用のおけない話のようです。

同時代の、そしてその後の他の調査によれば、サモアの若者たちも欧米の若者と同様に親と喧

嘩もするし、情痴犯罪だってある。フリーセックスももちろんありえない。またニューギニアの「男女逆転」の部族についても、たまたまミードが調べた時期、その部族は他部族との争いに負け、いわば冷や飯食いの時代であったので、男たちが元気がなかっただけということが分かっています。

それを初めて公的に指摘したのはニュージランドの文化人類学者デレク・フリーマンです。彼が一九八三年に出した『マーガレット・ミードとサモア』（紀伊國屋書店）の中で、マーガレット・ミードはサモアでフィールドワークをしたと言っているけれども、実は滞在中はずっとアメリカ人家庭で寝泊まりしていて、サモアの人たちと寝食をともにしていないこと、また言語にしてもわずか一〇週間ほど習っただけで、言ってみれば片言でしか会話ができなかったことなどを調べてあげて告発しました。

また、それと同時にフリーマンはサモアで実際に調査も行なって、この島に暴力も自殺もないというのがまったくの「神話」であって、実は我々の社会と大差がないということも詳細に記しています。

山岸 フリーマンによれば、サモアを訪れたミードが接触したのは主にサモアの若い女の子たちで、おそらくミードは彼女たちの「ほら話」を真に受けたんだらうというのがフリーマンの推理でした。

長谷川 要するに「よそ者」のミードをからかっていたんですね。彼女があんまり恋愛やセックス

山岸 それが言ってみれば「氏」派の話ですね。

この世の中はダーウィンが教えるように「優勝劣敗」なのだから、地球上の大陸のほとんどを支配している白人のほうが優秀であるのは明らかで、有色人種はどう努力しても白人には太刀打ちできないのだ、という考えです。

長谷川 後年のナチズムにもつながる思想ですね。

山岸 これに対して「育ち」派は、人間は教育次第でいくらでも変えることも成長させることもできるという考えですね。今から見れば、どちらも間違っているのだけれど、「育ち」派の代表格とも言うべきは行動主義心理学でした。そこでは、生まれたての人間は「タブラ・ラサ」、つまり何も書かれていない真っ白な石板だとされました。人間はなりたいたいのものに何でもなれるという、一種の科学万能主義ですね。

一九一五年にアメリカ心理学会の会長になったジョン・B・ワトソンは著書の中で、どんな子どもであろうと心理学者の手にかかれば「その子の才能、好み、傾向、能力、適性、親の人種に關係なく、何にでも——医者、弁護士、芸術家、大商人、そしてそう、乞食や泥棒にさえもしてみせよう」と書いたほどです。

長谷川 そこから社会主義も生まれてきます。

さつき言いましたが、マルクス主義では社会の下部構造、つまり経済制度を変えることで文明のあり方ばかりか、人々のものの考え方までも変えることができるとした。私的所有を廃止し、

産業を集団化し、計画経済を行なうことで「新しい人間」が作り出せるというわけです。
山岸 そうした考えが大前提となつて生まれたのが文化人類学でした。つまり、文化の違いを
探っていくことによつて、人間の持つ可能性を証明していこうという意気込みがそこにはあつた
んですね。

進化が分かつていなかった文化人類学

長谷川 そこでさらに付け加えると、ミードがサモアに行つた理由もそうでしたが、彼ら欧米の
文化人の中には「欧米社会は文明化によつて人々の心が汚れてしまつたが、地球上には西洋文明
と無縁な、つまりは無垢むくの文明があるに違いない」という思いがあつた。

山岸 第一次大戦が起きて、当時のヨーロッパは荒廃していました。たくさんの人々が戦争で
死んだし、毒ガス兵器なんかも使われるようになった。こういう文明はやがて滅びるんじゃない
かという危機感でしようね。

長谷川 マーガレット・ミードのサモア・レポートをその時代の知識人たちが無条件に信じた背
景にはそうした事情があつたんですね。

山岸 彼らからすると、サモアには人間の未来があるという感じだつたんでしようね。また、
社会進化論を唱える人種差別主義者たちに一矢報いたという気持ちがあつたでしょう。

長谷川　その気持ち自体はよく理解できます。つまり、物質的に豊かな白人よりもサモアの人々のほうがずっと精神的に豊かで、平和な暮らしを送っているじゃないかというわけですね。

山　岸　だから、ミードの論文が本当に正しいのかと検証する人は現われなかったわけだし、また、「サモアに行っただけけれども、ミードの書いたような話は確認できなかつた」と言う人があつても、ミードの発見にケチを付けるのかということになつたんでしようね。

長谷川　「ミードの時代の暮らしが西欧化で破壊されたから確認できないのだ」と言う人もいたでしょうしね。実際、『マーガレット・ミードとサモア』を書いたデレク・フリーマンも同書を出版するのには大変な勇気が必要としたそうです。でも、たまたまフリーマンは晩年のミードにインタビューすることができた。そこで彼女に「あれは間違いじゃないんですか」と直接聞いた。もちろん、ミードが今さらそれを認めるはずがないんですが、彼はそこでようやく発表しようと思つたそうなんです。

山　岸　ご本人に「書きますよ」と名乗りを上げたわけですね。なかなかできることではない。長谷川　まあ、それでも文化人類学者たちからは総スカンを食つたそうです。文化人類学会はこの本を、一種の禁書扱いにしたとも言われています。

山　岸　ただ、文化人類学のために多少弁護しておく、ミードたちの時代の文化人類学は「文化の差異」というところに注目していたわけですが、今日の文化人類学は「一見するとまったく違う社会のように見えるけれども、そこには共通点があるはずだ」という仮説のもとに、その共

通した部分とはいったいどんな要素なのかを調べる方向にシフトしています。

つまり、文化を通じて人類を研究するというわけで、「文化人類学」という日本語の名称に近づいてきていますね。

長谷川　とはいえ、やっぱり「差異」のほうに目が向いている研究者もまだ多いようですね。

山　岸　それもこれも、人間が一つの動物種であるという理解が定着していないからでしょうね。要するに進化についての理解が浅い。

人種差別思想は進化を白人支配に都合のいいように読み替えたわけですが、行動主義心理学や文化人類学もまた進化が分かっていたいなかった。彼らはホモ・サピエンスが進化の結果、誕生した生物種にすぎないということを理解していなかった。そのためにこんなとんでもない論文が長い間、真実だと思われていたわけですね。

長谷川　残念ながら、進化については二一世紀になっても正しい理解が広まっているとはとても言えませんね。

山　岸　そういうことです。そこで長谷川先生、「進化とは何か」ということをごく概略でもいいので説明していただけますか。

なぜヒトはヒトになったのか

長谷川　すでに何度も述べてきたことですが、人間とは何か、さらに人間社会とは何かということを考える際の大前提は「ヒトは生物である」という事実。言い換えれば「ヒトは進化の産物である」という視点ですね。

ヒトはある日、突然に現われたわけではないし、ヒトの知性も突如として誕生したわけではない。あくまでも進化のプロセスの中で我々ホモ・サピエンスは誕生しました。だから、人間とは何かを考えるには、まず「なぜヒトはヒトになったのか」という考察が必要になってきます。

そこで大事なのは、その進化のプロセスは何かの目的やゴールがあるわけではないという理解です。それぞれの個体が次世代に自分の遺伝子を残そうとした中で、環境に最も適合したものが生き残り、それが積み重なっていつて進化が起きているわけで、進化そのものには目的も設計図もない。

山　岸　神様が人間を設計したというわけではない。

長谷川　進化の解説をしはじめたら、それだけで何時間も必要になりますが、ここでは基本的なことだけを押さえておきましょう。

山　岸　よろしくお願いします。

長谷川　そこでまず重要なのは「自然淘汰」を理解することです。

ダーウィンが唱えた進化論のキモとも言わべきアイデアは「自然淘汰によって進化が起きる」ということだったのは多くの読者も学校で習ったことでしょう。つまり、その生物が置かれてい

る環境に適応した形質が世代を超えて広がっていき、それによって進化が起きてくるということ
です。

しかし、この「自然淘汰」というアイデアをきちんと理解している人はものすごく少ない。と
いうのは、ある種の形質が出現して、それが後の世代に広まっていったからと言っても、そうし
た形質の変化が「正しい」から起きたというわけではありません。

たとえば、魚類の先祖は水の中を泳げるように進化したわけですが、しかし、最初から「泳げ
るようになる」という目的があつたわけではない。最初からヒレやエラを発達させようという方
向性があつたわけではない。

山 岸 突然変異の中で、そうした形質が生まれた。つまり偶然の産物ということですね。

「いい変異」「悪い変異」はない

長谷川 しかも、その突然変異はあくまでも個体単位で起きたことで、何かのきっかけでその種
全体が突然変異をするわけでもありません。

たとえば、突然変異でヒレのようなものが出来た個体が生まれますが、その個体が生き延びて
同じ特徴（形質と言います）を持った子孫を増やしていき、種全体にその特徴が広まったときにそ
こで初めて「進化が起きた」と言う。つまり新しい種が出来たということになるわけですね。

でも、そうした突然変異した個体がかならずしも生き延びるとは限りません。突然変異というのは、要するに遺伝情報に異常が起きたということですから、ヒレのようなものが出来ても、その結果、動きが鈍くなったりして外敵から襲われやすくなれば、その個体は子孫を残すこともできずに死んでしまいかもしれません。

また、かりに運良く子孫を残せたとしても、その子孫が順調に増えていくというものでもありません。多少、子孫が増えてもその種の中で一定の地位を占めることができなければ、やがて消えてしまおうでしょう。

要するに、突然変異に「いい変異」「悪い変異」はない。残るかどうかは、その個体が暮らしている環境が決める。環境に適応できた個体の遺伝子は子孫に伝わるが、適応できなかった個体の遺伝子は後代に伝わらない。あくまでも進化の基本になるのは、その個体が生き残れるのかどうかなのです。

魚の例で言えば、進化のある段階でたまたまヒレのようなものを持った個体が突然変異で生まれ、それが与えられた環境——すなわち水の中——においては生き残りの役に立ったものだから、その遺伝子を持った子どもたちが生まれ、さらにその孫が生まれていって、その形質が種全体に広がっていった。最初から泳ぎに適したヒレや流線型の身体を作ろうという目的を持って、進化が起きたわけではないのです。

山 岸 実際、その魚の祖先が生きていた湖や海が干上がり、それらの個体が死んでしまえば、

そうした進化は行き止まりになってしまおうでしょう。私たちは現時点から過去にさかのぼって進化を考えてしまうので、進化とは何と精妙なことかと感心してしまうんですが、それまでには数え切れないほどの試行錯誤があるわけですよ。

長谷川 こうした進化の仕組みを今日では「適者生存」とも言うのですが、この言葉を造り、広めたのは他ならぬ社会進化論のスペンサーでした。ダーウィンはこの言葉を嫌っていたそうです。

すべての生物は「勝利者」である

長谷川 というのも、進化とはこうした仕組みによって起きているわけですから、進化においてはどちらの種が優れているとか、劣っているということはありえないわけです。

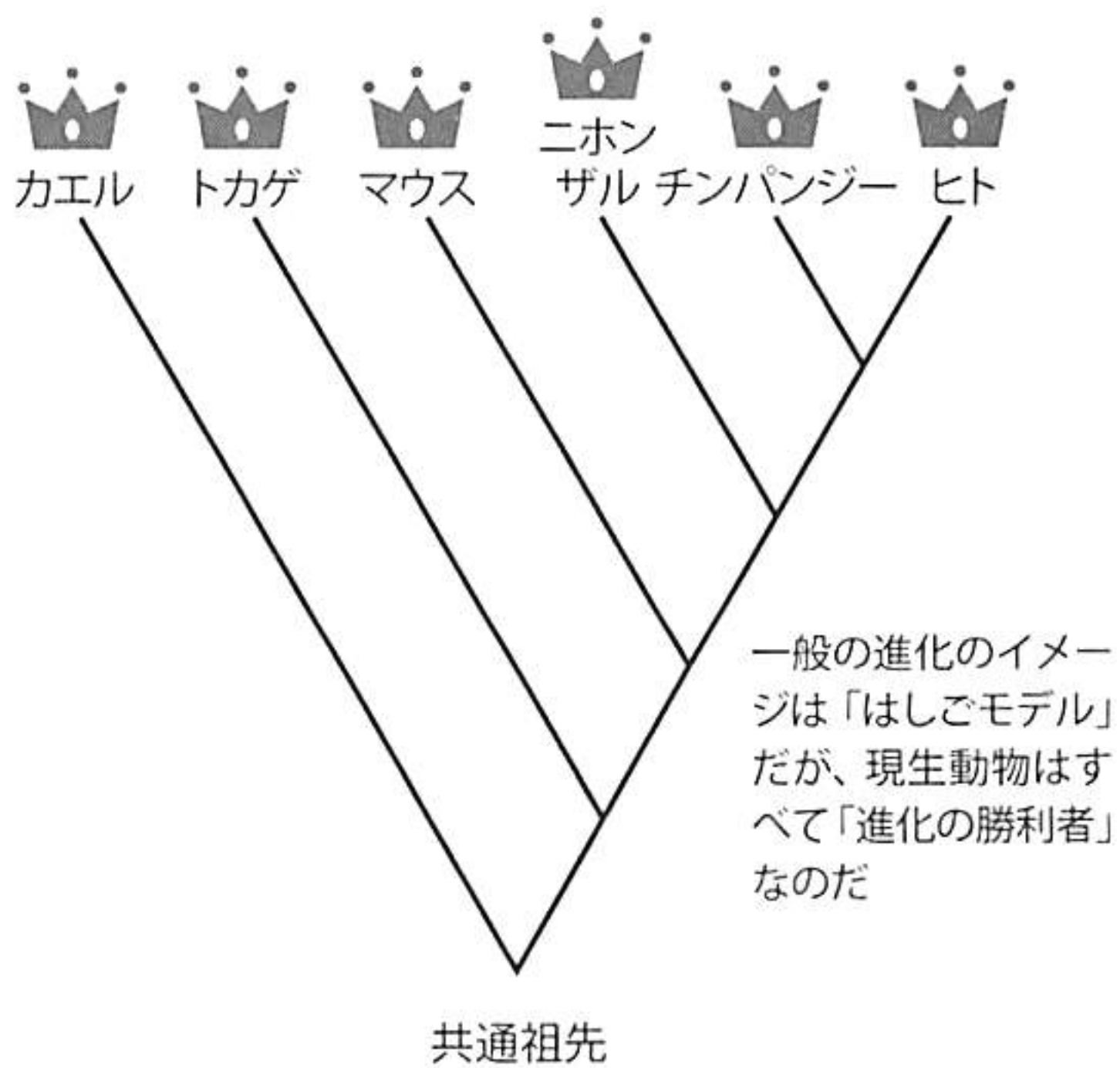
山 岸 それを「適者」と表現すると、あたかも優劣があるような印象を持ってしまいますね。

長谷川 そのとおりです。現在、地球上に生きている生物はみな何らかの形で環境の変化に適応して生き残っているわけですから、その意味ではみなが等しく「適者」であるわけです。

アメリカのキリスト教原理主義者たちが考えているように、人間はゴリラやチンパンジーよりも優れた生き物というわけではありません。人間もゴリラもチンパンジーもみなそれぞれの環境の中で適応しているからこそ、今、同じ地球上に存在しているのですからそこには優劣などは存在しません。



はしごモデル



枝分かれモデル

一般の進化のイメージは「はしごモデル」だが、現生動物はすべて「進化の勝利者」なのだ

山岸 彼らが唱えている「インテリジェント・デザイン」説では「単なる試行錯誤で、人類のような優れた種が生まれたはずがない。人類が地球上に生まれたのには何らかの知性（インテリジェンス）の介在があつたに相違ない」というわけですが、そもそもアメーバのような単細胞生物は「下等」で、サルやヒトは「高等」な生物だという理解がすでに間違っている。

長谷川 なぜそんな誤解が生まれるかというと、一つにはいわゆる系統樹から間違つたメッセージを受け取ってしまったからだと思うのですね。

たとえば、ヒトの進化の場合だと系統樹の頂点にヒトがいて、チンパンジーやゴリラはそのコースから逸脱、あるいは落伍してしまつたのだと受け止めている人がとても多いのですが、そうではなくて、一つの大きな樹の幹からヒト

という枝も出ているし、チンパンジーやゴリラという枝も出ているということなんです。進化と
いうのは枝分かれなんです。

山 岸 「自然淘汰」によって、ヒトという種が勝利を収め、チンパンジーやゴリラは負け組な
んだと理解されています。

長谷川 そこが大きな間違いで、いま地球上に存在するすべての生物は、進化の「最先端」にい
るんです。

山 岸 どんな生物であっても、今も進化のプロセスは続いている。今は「成功者」のように見
えたとしても、環境の変化に適応できなければその種は滅びてしまいますからね。

長谷川 しかもそれが個体レベルで起きている現象であるというのが重要なんです。

知性とはサバンナ生き残りのツールだった

山 岸 そこでお聞きしたいのは、やはりヒトの進化です。

ヒトはチンパンジーやゴリラなどと共通の祖先から枝分かれしたものであるわけですが、いま
での話を踏まえれば、ヒトという種が進化によって誕生した背景には、ある特定の環境に適応す
る必要があったということですよ。

長谷川 チンパンジーやゴリラは大型類人猿と呼ばれますが、チンパンジーやゴリラとの共通の

祖先から分岐し、我々と同じく「ホモ属」に分類される種が現われるのが二百数十万年前のことです。その最古のものがホモ・ハビリスと呼ばれる種類です。

山岸 そのホモ・ハビリスが生まれるに至ったのにはやはり環境の変動があつたということですね。

長谷川 一言で言つてしまえば、それは「森林からサバンナへの移動」ということですね。と言つても、彼らは好き好んでサバンナに行つたわけではありません。気候変動によつてジャングルが縮小したのだと思われれます。本当はジャングルの中で生活しているほうが、食糧となる果物が豊富に、しかも簡単に手に入るのですが、そういう生活を続けられなくなつた。それが進化の契機になつたわけですね。

山岸 そこでまず二足歩行ができるようになったというわけですか。

長谷川 かつては、直立二足歩行はサバンナで生活するために進化したものであろうとされていたのですが、最近の研究ではどうもホモ属の前の段階の猿人の時点ですでに二足歩行していたと分かつています。今から三〇〇万年前の「アファール猿人」の遺跡では、彼らの足跡がはっきりと残っていますし、それ以前の猿人もどうも二足歩行できていたようです。

まだ森の中にいたのに、なぜ彼らが二足歩行するに至つたのかというと、その理由はまだ明らかになつたわけではありませんが、おそらくそれも気候変動と関係していたでしょう。森林域が縮小したり、あるいは森林で食物を得にくくなつたために、他の類人猿とは違う生息環境を開拓

しないとならなかつた。それはきつと森林とサバンナとの境界線あたりではなかつたかと思われ
ます。

ただし、彼ら猿人の脳の容量を調べると、他の類人猿の脳とさほど違いがあるわけではありま
せん。

山 岸 なるほど、二足歩行が直接、脳の発達をもたらしただというわけではないのですね。

長谷川 ホモ属の脳の発達、知性の発達の原動力となつたのはやはりサバンナへの進出です。

といつても、彼らが森林を出て、サバンナに生活の場を移したのはけつして望んだからではあ
りません。おそらく気候変動によつて森林が縮小したために、やむなくサバンナに暮らさなくて
はならなくなつたのでしょう。

先ほども言いましたが、手を伸ばせばいくらでも果実が手に入る森林生活とは違い、サバンナ
での食糧調達はけつして容易ではありません。そもそも果実は手に入らないし、かといつて肉食
をしたくともサバンナにはライオンやヒョウという「ライバル」たちがいますから、そう簡単に
獲物が手に入るわけもない。せいぜい、そうした肉食獣の食べ残しにありつくのが関せきの山やまであつ
たでしよう。

山 岸 食糧を得るために脳の発達が必要になつたわけですね。

生き延びるための「社会」

長谷川 大きな流れとしてはそうなりますが、そこでかつて言われていたのは「ハンター仮説」です。

つまり初期の人類、それもオスがサバンナで獲物を狩るために二足歩行ができるようになった、狩猟で肉が大量に食べられるようになったので脳が発達し、協同してハンティングするためには葉が生まれ、そして狩猟で得た肉を特定の女性に分け与えたので一夫一婦の絆きずなが生まれた、というストーリーです。

山 岸 男性中心主義を絵に描いたような仮説ですね。

長谷川 ええ、これは男性にとっては何ものすごく美しいファンタジーですね。男たちが知性を作り、社会を作り、女性を養ったというわけですから。

そもそも、二足歩行は森に暮らす猿人の段階ですでにできていたわけですし、また狩猟だけで食べていけるほどサバンナ生活は楽ではありません。とてもオスだけの働きでは生きてはいけな
いのです。このハンター仮説は一九六〇年代から七〇年代にかけて一世を風靡ふうびしていたのですが、あまりにもご都合主義だといっているのであつという間に失墜しました。

それよりも今日、重視されているのは一九七〇年代後半にグリーン・アイザックという人類学者

が提出した「ホームベース」仮説です。

アイザックは初期のホモ属たちが発達させたのは狩猟能力ではなくて、集団生活の能力であつただらうと考えました。ヒトはまずホームベースと呼ばれる拠点で集団生活を行ない、それぞれが調達してきた食糧を持ち寄ることによって命をつなぐと同時に、そこで子どもを養育なども行なつていたのではないかというわけです。

そして、そうした共同生活を行なう中で、男性も育児に協力するようになり、また夫婦の絆も生まれ、言語的なコミュニケーション能力も培われたのだらうと考えたのでした。

山岸 生き延びるためにヒトは社会を作り、その社会を維持するために知性を発達させたというわけですね。

「社会脳」仮説とは

長谷川 このあたりはそれこそ山岸先生の専門になるわけですが、いわゆる「社会脳」仮説ですね。

山岸 マーガレット・ミードの話の中でも出てきましたが、かつては「人間の知性は万能である」と考えられていました。人間は最初から、複雑で抽象的な思考能力と高度な言語能力を兼ね備えた、いわばスーパーコンピュータのような脳を持っていたのだというわけですが、進化論か

ら考えれば、そんな脳みそがいきなり出来るとは考えられない。脳も臓器の一つである以上、まずは生存に役に立たないかぎりには存在するわけありません。

長谷川 数学や文学が出来たところでサバンナで生き延びることはできませんからね。

山 岸 では、サバンナで生き延びるために脳は何の役に立つのか——もちろん、道具を作ったり、獲物を見つけるのにも脳は必要ですが、それは別にサバンナでなくても発達するでしょう。

長谷川 実際、森林に棲む類人猿たちも道具を使いますし、また、果実のありかを上手に探すための情報処理能力を持っています。

山 岸 では、サバンナで生きるためにはどんな知性が必要か——それは集団内で上手に生きていくための知恵だったというのが「社会脳」仮説です。つまり、同じ空間の中で他者と共存し、協力し合って生きていくための知性ですね。具体的には集団内での衝突を回避するために他者の心の中を想像する能力が必要ですし、また他者から食糧を分け与えてもらったときには、そのことを記憶する能力も必要です。

長谷川 他者に何かを施しても、そのお返しが期待できなければ、ギブ・アンド・テイクの暮らしはできません。それには誰からももらったかという個体識別の能力もないといけないし、また、すぐにはお返しができないわけですから、もらったことを長期間、記憶できないといけない。さらに、「肉には肉で」という同じモノのやりとりではなくて、肉のお返しに果実を与えたり、あるいは労働で返したりするという、価値を変換する能力もないと困りますね。

言葉はゴシップ・トークのために生まれた？

山岸 言語能力についても、おそらく社会を作るために必要だったのでしょう。イギリスの人類学者ロビン・ダンバーは「言葉とはサルの毛づくろい（グルーミング）と同じなんだ」と言っています。つまり、集団生活をしていると個体間に軋轢あつれきが生まれるわけだけでも、サルの場合はそうした緊張を緩和するためにお互いに毛づくろいをしている。要するにスキン・シップで集団生活を成り立たせているのですが、そのやり方が通用するのは少数の群れだからで、数が多くなったらそうはいかない。

長谷川 それこそ一日中、いろんな相手に毛づくろいをしないとならなくなりますものね。

山岸 そこで毛づくろいの代わりに発達させたのが言葉だというわけですね。ダンバーの考えでは、そもそも言葉というのは他人の噂話、ゴシップ・トークをするために発達したものではありません。つまり、種々雑多なメンバーたちに関する情報交換をするのに言葉が発達したんだろうというのです。

友だちの数の上限は一五〇人

長谷川 彼は「ダンバー数」というユニークな仮説も提案していますね。

山 岸 ダンバーは霊長類の脳、ことに新皮質の大きさと集団のサイズが比例することに着目しました。

長谷川 自分が属している集団の中で何が起きているのか、その中の力関係がどうなっているかを把握するために新皮質が発達したのではないかというわけですね。

山 岸 ダンバーは霊長類のデータを元に、ヒトの新皮質は本来、どの程度のサイズの集団に対応するために発達したのかを推計したところ、その数はおよそ一五〇人ではないかという結論になった。

長谷川 それがダンバー数というわけですね。

山 岸 一五〇人というのは普通の生活実感からすると、とても小さな数に見えます。現代の人間の多くは組織の中で仕事をしていて、日常の業務で一〇〇人どころか、つねに何百人という規模の人たちと一緒に仕事をしています。また、それ以外にもプライベートではSNSを活用して、数百人、いや数千、数万人とつながっている人も珍しくありません。

長谷川 私たち二人はSNSなんて馬鹿らしいからやっていませんけどね。

山 岸 いくらたくさんさんの知り合いがネット上で出来たとしても、そういう人たちが「仲間」と言えるか。なぜ馬鹿らしいかというのと、ダンバーの言う、一五〇人という上限が正しいからです。たしかに私たちの手帳や住所録には一〇〇人を軽く超える人たちの名前があります。また、仕事

関係で交換した名刺の数は何百、いや何千にもなるでしょう。

でも、そうした人たちははたして「知り合い」と言えるかということですね。

長谷川 集団を作るといのは、単に顔を知っているだけではダメで、言ってみれば「彼（彼女は身内だ）」という感覚がないといけません。そうでないと、お互いに助け合おうという行動、利他行動が起きません。

山 岸 だから昔から軍隊のような組織では、だいたい一〇〇人が基本単位になってヒエラルキーが作られています。

長谷川 古代ローマの軍隊にはその名もずばり百人隊長という職名もありますね。リーダーは個人のメンバーの能力や性格を把握したうえで命令を下さないといけません。部下の数が一〇〇人以上になるとフォローしきれないということ。彼らは経験的に知っていたんでしょうね。

山 岸 軍隊に限らず、およそどんな組織でも基本単位は一〇〇人〜二〇〇人で、それ以上、メンバーが増えると部署を分割せざるをえないし、学問の世界でも研究者がおたがいの仕事を注目し合えるのも一〇〇人〜二〇〇人で、それを超えるといくつかの研究カテゴリーを分割していくという研究もあるようです。

私はどっちかというとな名前や顔を覚えるのが苦手なんですが、「私はダンバー数以上に多くの人を覚えられる」という方は少くないでしょう。しかし、相手の気持ちを忖度そんたくして、その人のために適切なことをしてあげられるというくらい親密な関係を結ぶとなると、人間の脳の処理

能力には限界があるんですね。

ホモ・エレクトウスの「出アフリカ」

長谷川 ではいったい、一〇〇人〜二〇〇人という限界はどうして生まれたのか。もうここまで来れば、だいたい予想できるでしょうが、それはヒトがなぜヒトになったかということを考えると答えは自ずから明らかです。

進化とは個々の動物が環境に適応し、生存・繁殖しているこうとする、そのプロセスの中で生まれてくるものですが、進化をもたらした環境のことを進化適応の環境、E E A (Environment for the Evolutionary Adaptedness) と言います。「進化適応の環境」やE E Aという言葉は読者に耳なじみがないでしょうから、本書では縮めて「進化環境」と言うことにしましょう。

前にもお話ししましたが、チンパンジーやゴリラと同じ祖先からヒトが進化したのは気候変動によって寒冷化が起こりはじめたころでした。どんどん、アフリカの森林が縮小していく中で、彼らはジャングルからサバンナへと生活の場を移します。ジャングルに暮らしていたヒトのご先祖さまもきつとある程度の集団生活を送っていたはずですが、しかし、ジャングルでの集団の作り方がそのままサバンナでも通用するとは限りません。いや、ほとんどの場合、サバンナに出で行った集団は滅びたでしょうね。

山岸 結果から見れば人間はすんなりサバンナに適應したように見えるけれども、しかし、実際には無数の試行錯誤があつた。それは数十万年とかの単位の話になるんでしょうか。

長谷川 ホモ属の最古のものがホモ・ハビリスで、それが二百数十万年前とお話ししましたが、それから数十万年後にホモ・エレクトゥス（ホモ・エルガスター）と呼ばれる原人が誕生します。ホモ・エレクトゥスは完全骨格も見つかっていますが、ひじょうにすらりとした体格で、プロポーションも現代人とほとんど変わりません。このホモ・エレクトゥスの化石はアフリカだけでなく、東南アジアでも見つかっています。前にも少し触れましたが、これを聖書のモーゼの物語になぞらえて「出アフリカ」と呼ぶ人もいます。

このホモ・エレクトゥスはホモ・ハビリスよりも脳は大きく、石器や火を使っていたようです。また体型から考えると、今の私たちと同じく、赤ん坊を未熟なうちに出産していたはずですから、育児には男も参加していただろうと思われれます。

山岸 彼らはどのくらい、地上に生きていたんですか。

長谷川 だいたい一〇〇万年くらいですね。

山岸 それはすごい。

長谷川 ええ、一〇〇万年も生き延びることができ、しかも東南アジアまで進出したのですから、相当に環境に適應していたのでしょう。しかしながら、この一〇〇万年間、彼らの文明が進歩したかというところではない。彼らの使っている石斧いしかのはたいへんに優れたものだったのですが、そ

れを改良した形跡はほとんど見られません。

山岸 現代人が農耕を始めてからわずか一万年でこれだけ文明を発達させたことを考えると、一〇〇万年も同じままだったというのは、やはり彼らと私たちとの間に決定的な違いがあったんでしょね。

脳を大きくして気候変動を乗り越えたネアンデルタール人

長谷川 ええ、その違いとは何か——そこで出てくるのが環境要因です。

というのも、ホモ・エレクトゥスが完全に滅びるのは約三〇万年前。この時代、地球は氷河期と間氷期の間で激しく揺れ動いていたので、おそらく彼らはその環境変動を乗り越えることができなかったのでしょう。

その代わりに現われたのが古代型サピエンスと呼ばれる、現代人によく似たホモ属です。最も有名なのはネアンデルタール人ですね。彼らは今から四〇万〜五〇万年前に地上に現われましたが、彼らとホモ・エレクトゥスの大きな違いは脳の容量です。何しろネアンデルタール人の脳は現代の私たちの脳よりも大きい。

山岸 他の動物ならば、たとえば寒冷化に対応するには皮下脂肪を厚くしたり、身体を大きくさせたりするんですが、ネアンデルタール人は脳を大きくして乗り越えたというわけですか。

ネアンデルタール人というと、いわゆる「原始人」というイメージで想像しがちなのですが、そうではなかったんですね。

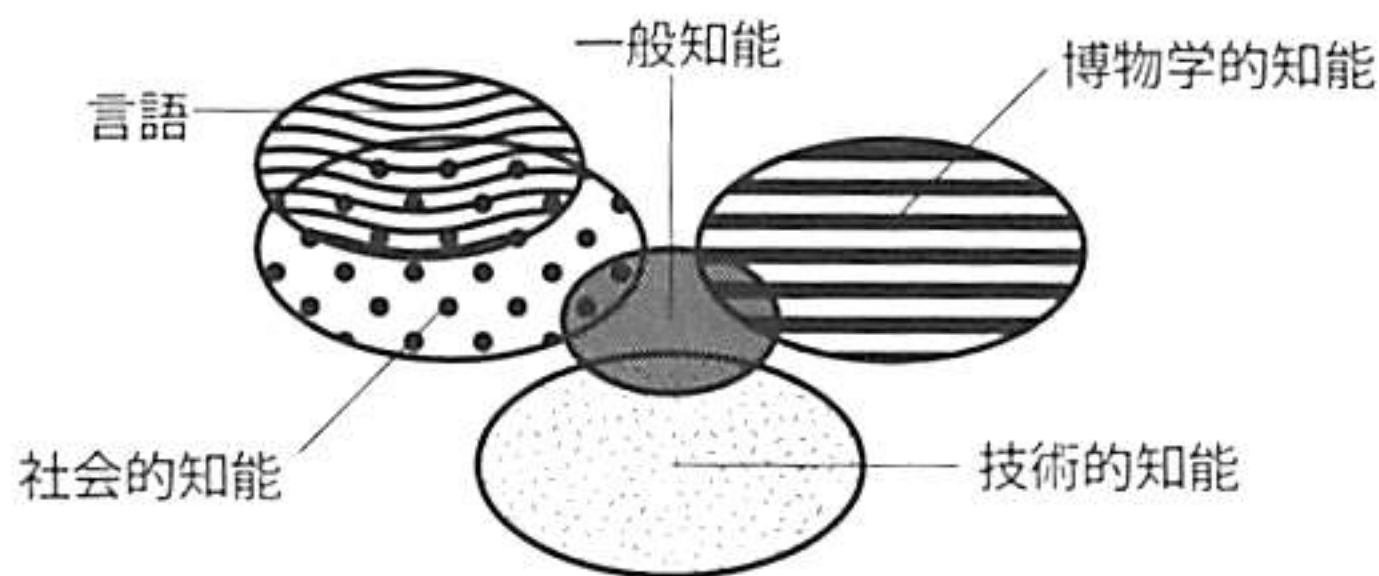
長谷川 彼らがはたしてどのような「心」を持っていたか、それを知る手がかりはほとんどありません。心は化石にはなりませんからね。しかも、これだけの大きな脳がありながら、装飾や芸術のような文化的痕跡がほんの少ししか残っていません。だから、ずっとネアンデルタール人は、山岸先生がおっしゃっていた「原始人」あるいは「愚か者」というイメージで捉えられてきました。

しかし、脳のサイズがここまで飛躍的に大きくなったというからには、やはりそこには与えられた環境に対応するための能力が備わっていたと考えるべきではないでしょうか。

認知考古学者のステイブ・マイセン (Steven Mithen) は、ネアンデルタール人は博物学的知能、技術的知能、社会的知能の三大能力がそれぞれ独立に機能していただろうと推論しています。

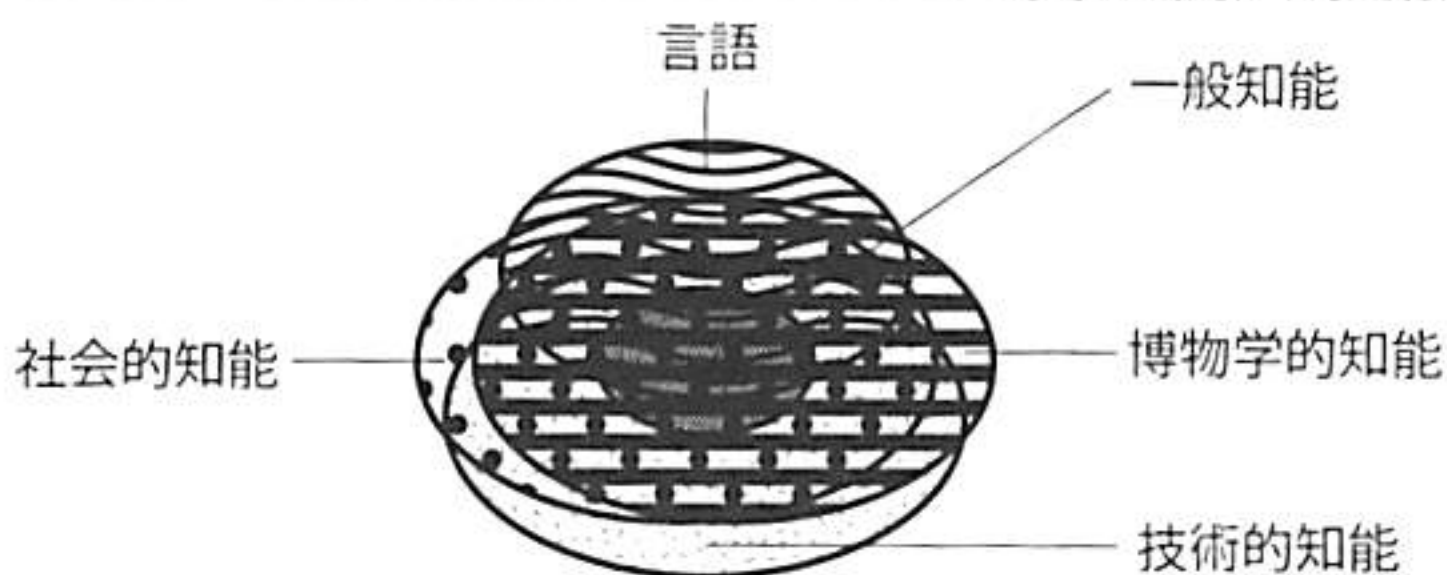
脳はツールボックスである

山岸 かつては、脳はプログラミング次第でどんな働きもできる「万能コンピュータ」として考えられていました。しかし最近では、脳はカナヅチやノコギリ、ノミといった、それぞれに用



ネアンデルタール人

Steven Mithen "Prehistory of Mind", 1996



ホモ・サピエンス

途が決まった工具が入っている道具箱のようなものであって、我々はそれぞれの局面で必要なツールを取り出しては使っている——脳はツールボックスであるという考えが主流になりつつありますが、マイセンはそうしたツールボックスのような脳がネアンデルタール人のころに出来たと言っているわけですね。

長谷川 寒冷期に生きたネアンデルタール人にとっては、獲物となる動物の生態を知ることや、食料保存の技術などを考え出すことはまさに死活問題だったでしょう。博物学的知能とは動植物を分類して、その特徴などを把握するメタ認知の機能、技術的知能は食糧を保存したり、道具を作るのに必要な知能、社会的知能は集団の中で協力し合っていく知能ということ、どれも寒冷期を生きるネアンデルタール人には必要不可欠なものだったと思われれます。マイセンは、

ヒトの知能はこの三つの「道具」からスタートしたと考えています。

ちなみに彼の推定ではネアンデルタール人は言語能力はそれなりに発達はしていたであろうとされています。しかしながら、先ほども述べたように彼らは芸術やトーテムズム（原始的な部族信仰）、複雑な道具などを作り出せなかったのもので、おそらく一般的な知能が乏^{とぼ}しかったのだらうとも言っています。

山岸 裏を返せば、私たちホモ・サピエンスは芸術や信仰、あるいは複雑な道具を考える知能でネアンデルタール人よりも優れているというわけですね。

「社会」の誕生

長谷川 ホモ・サピエンス、つまり現代人の登場はおよそ二〇万年前のことですが、ここで初めて「社会」というものが生まれたんじゃないかと思っています。

山岸 長谷川先生の考える「社会」の定義とはどういうことなんでしょう。

長谷川 それを一言で言うならば、ヒトの社会は幻想を共有する集団だということですね。

山岸 それは面白い着眼点ですね。でも、社会を作る生物は、ヒトだけではありませんよね。群れを作って生活する動物はたくさんいますし、ハチやアリのように集団の中で明確な役割分担を持つものもあります。そういう社会と私たち人間の作る社会は、どこが同じで、どこが違うの

でしょう。

長谷川 あらゆる動物は「単独性」か「社会性」かに分類できます。単独性の動物は、群れを作らずに一匹だけで生きている。家族を持つこともないし、子育てもほとんどしません。繁殖するときはオスとメスが一緒になりますが、それ以外は個体同士の関係性がなく、卵も生みつばなしで死んでしまいます。

それに対して、何らかの形で複数の個体が群れを作って生きているのが社会性の動物ですね。これには、ピンからキリまであります。

たとえばアフリカの大草原にはヌーのような大型の有蹄類ゆうていりいが何万頭も群れを作っていますが、あれは単に一緒にいるだけで、個体同士の関係性はほとんどありません。大勢で一緒にいるといわゆる「薄め効果」で捕食されにくくなるから、群れを作る。それだけの話ですから、複雑な相互作用はありません。

山 岸 大きな集団であればあるほど、自分が捕食される可能性は減るといなのが「薄め効果」ですね。

長谷川 一方、サルや類人猿の群れでは個体同士が識別し合っていて、その中で順位を作ったりしていますので、私たちの考える社会に近いものがありますが、動物学的に言うとなーもサルもともに「社会性」の動物とされます。

生物が社会性を持つ理由についてはいくつか仮説があります。先ほどの捕食回避も、その一つ

ですね。また、食べ物などの資源を同種の個体同士で奪い合うより、集団を作って他の集団と対抗したほうがいいという面もあると考えられます。もう一つは、繁殖ですね。一組のつがい、子育てをしているより、みなで集まって、その中でたくさんの子どもを育てれば、より子孫が繁栄するようになる。

「幻想の共有」で社会は作られている

長谷川 ヒトの社会も、元々はこうした理由から生まれたものであるのは間違いないわけですが、決定的に違うのはヒトの社会がまとまりを保っているメカニズムです。それが何かというと、私は「幻想の共有」ということだと思っんです。

山 岸 先ほど、ネアンデルタール人にはトーテミズムがなかったとおっしゃいましたが、まさにそれが幻想ですね。

長谷川 自分たちの部族には「ご先祖さま」がいて、それがチーターだったり、鳥だったりするというのがトーテミズムですが、こうした形で仲間意識を共有するというのはゴリラやチンパンジーにはないし、おそらくネアンデルタール人にもなかったでしょう。

山 岸 幻想の共有とは近代国家においても通用する話ですね。

たとえば幕末維新までは「日本人」は存在しませんでした。日本列島に暮らしていたのは、何

とか藩の藩士だったり、あるいはどこそこの町人、職人という存在で、それらを束ねる概念が存在しなかった。幕末の維新の志士たちは、藩の垣根、身分の垣根を越えて「日本」という国を作らないといけないと考えたわけですが、これこそが幻想ですね。でも、そうした幻想がなければ、同じ日本列島の中に暮らしていたとしても、同胞意識は生まれなかったでしょう。もちろん、それは日本に限ったことでなく、フランスでもイギリスでもアメリカでも同じわけですが。

それにしても「幻想が社会と群れとを区別する」という話は実に面白いと思います。

長谷川 社会とは何か。その定義はさまざまにあるんでしょうが、群れと社会を考えると割合、分かりやすいと思うんです。というのは動物の作る群れには帰属意識は必要ないんですね。とにかく物理的に同じ空間にいれば群れということになるんですが、ヒトの社会はそれ以上のものがないといけない。それは帰属意識ということだろうし、「あいつと俺とは仲間だ」という感覚だろうと思うんです。

山岸 逆に言えば、人間の場合、ただ同じ場所においても社会にはならないということでしょう。
長谷川 そこには何らかのファンタジー、幻想が必要なんです。同じ国民だとか、同じ組織の一員だとか、そういうアイデンティティの共有が人間の社会にはかならず必要なんだと思います。

仲間意識でサバイバル

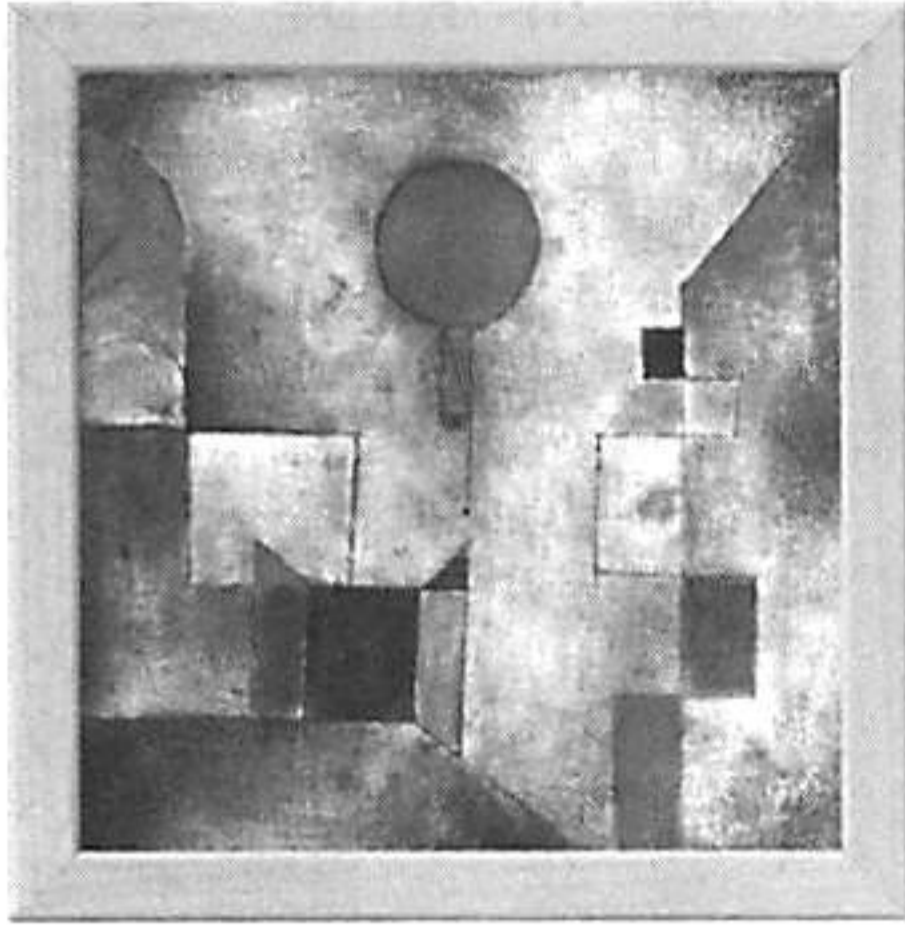
長谷川　ここから先は山岸先生のご専門の話になるわけですが、個としては生き延びていくことができなかったヒトは社会を作って、その中で相互に助け合うという進化を遂げました。

この相互に助け合う行動のことを、社会心理学では「利他行動」と言うわけですが、こうした利他行動は「ギブ・アンド・テイク」という簡単なロジックでは説明がつかないですよ。

山　岸　ええ、単純な話、誰かが自分のために何かをしてくれると分かっているならば、それにタダ乗りしたほうがいいわけで、いちいちお返しするのはむしろ合理的ではない。でも、そういう合理的な判断をみんながしたら、社会は成り立ちません。

長谷川　そこで大きな役割を果たすのが幻想、言い換えればアイデンティティですよ。「あいつと俺は分かちがたい仲間、身内なんだ」と思えるかどうかはヒトの利他行動の鍵になる。

山　岸　これは前に長谷川先生にお話をしたことがあるからご記憶だろうとは思いますが、私たちのやっている研究では、どういう条件下では人は助け合うのか、あるいは逆に非協力になるのかということを実験で調べています。そこでまず分かったのはたとえば実験の前に二つの絵を見せて、どちらが好きかということだけで組み分けをしたとしても、同じグループに属している人たち同士は助け合うが、違うグループの相手だとなかなか協力関係が築けない。



人間はたとえ「クレイ（左）を選ぶか、カンディンスキー（右）を選ぶか」という基準であっても「身内」を特別扱いしたくなる生き物なのだ

長谷川 お聞きした話では、絵を見せてどちらが好きかを訊ねてグループ分けをするんですけどね。

山岸 この実験ではクレイとカンディンスキーを選択してもらいました。

長谷川 それは素晴らしい選択。どっちも抽象画で、どれがクレイかカンディンスキーか、素人目には区別が付きませんものね。

山岸 そこをあえて選んでもらって、それでグループ分けをする。どっちの絵が好きかなんて、その人の趣味でしかないし、また同じ人でも日によっては選ぶ絵が違いかもしれない。普通に考えたら、そこでアイデンティティを共有できるとは思わないじゃないですか。

ところが面白いことに、同じ組になった人同士は協力関係を結ぼうとするし、そうでない人たちとは協力関係が作れない。

長谷川 それはつまり、どういう基準であつても同じグループに入れられたら、そこに人間は帰属意識というかアイデンティティを持ってしまふということですね。

山岸 本当ならば、自分と同じ絵を好きな人を助けなくてはいけない義理はどこにもない。でも、相手は自分の仲間だと思ふとついつい助けてしまふんですね。

長谷川 人間は自分から幻想の共同体を作り出してしまふ存在であるとも言えますね。

山岸 同じ側にいる人に仲間意識を感じる、そういう心の動きを持った個体のほうが進化環境においては生き残れた。そして、そうした心の動きが今でも私たちの脳の中にあるということですね。

長谷川 たしかに大自然の中で生き延びていくためには、とにかく仲間意識をおたがいで持ち、協力関係を作れないと共倒れになってしまう。だから、一緒にいるだけで相手に愛着を持つような心になっているんでしょね。そこで「こいつと行動したら損か得か」などと考えている暇なんかない。

「ついで」助けたくなる心

山岸 と言つても、そこで同じ側にいたらみんな自動的に仲間だと思つて助け合ふかというところ、実はそうでもない。そこまで人間は単純ではないんですね。

というのも、さらにその実験を細かく条件分けしてやっていると、相手と自分がともに同じ組であつても、相手側がこちらを同じ組の人間だと認識していないことが分かると、協力的な行動をしないことが分かった。

長谷川　こっちは相手を仲間だと思つていても、相手がそう思つていてくれないのでは親切にする意味がないというわけですね。非対称性があるとダメ。

山　岸　でも、どこまでも「打算的」な行動ができるかと言えばそうではない。

たとえば一回きりのゲームをやつてもらつて、そこで利他行動ができるかどうかを調べる。その場合、相手に対して協力的な行動をしても「お返し」は期待できませんよね。だったら、利己的な行動をしてもいいはずなんです。おたがいに仲間だと認識しているとなつて協力的に行動してしまふんですね。

長谷川　「つら」というところがポイントですね。

山　岸　先ほど長谷川先生がおっしゃつたとおり、ヒトの進化環境ではそうやつて仲間同士で助け合う行動を採つたほうが生き残りに有利に働いたんでしよう。だから、相手と自分が同じ集団に属していると分かるとついで優遇してしまふ。社会心理学の用語で言うと「内集団びいき」が起きるんですね。

長谷川　卑俗な言葉で言えば、身びいきということですね。

そうやって考えると、そもそもネアンデルタール人と違ってホモ・サピエンスがトーテムリズム

や神様を信じる能力を持っているのも、そうした内集団びいきを強化するために必要であったという解釈もできますね。

山岸 同じ神様を信じているということになれば、より結束は強まるでしょうね。

なぜ人は神を信じるのか

長谷川 進化心理学者のジェシー・ベリングはその著書『ヒトはなぜ神を信じるのか』（化学同人）の中で自分の小学二年生時代の思い出を書いているんですが、友だちの家に遊びに行ったとき、そこに飾られていたイースターエッグを間違って壊してしまっただけですね。

でも彼はそのことを告白せずに、ずっと黙っているわけですね。で、その友だちのお母さんが「ジェシーが壊したんじゃないかしら」と気づいて、彼を問い詰めるんです。すると、幼いジェシーはそこで「神に誓って、僕はそんなことをしていません」とつい言ってしまった。

もちろん、これは子どもにありがちな言い逃れなんです。彼はその日から「ウソをついておきながら、神様を引き合いに出した僕には天罰が下るんじゃないか」とノイローゼみたいになっ
てしまっただけです。

彼の家庭は父親がプロテスタントで、母親がユダヤ人なんですが、家庭には一冊も聖書がないという、非宗教的な環境で育ったそうなのです。なのに、なぜ自分はそのとき、神様から天罰が

下るかもしれないと考え、心の底からおびえたのだらうかと彼は自問するわけですね。そこから彼は進化心理学の研究へと進むことになったのですが、大人から教えられなくても神様の存在をリアルに想像できるというのはたしかに面白いですね。

山岸 なぜ人は神を信じるようになったのか、言い換えるとなぜ神を信じるような脳が進化によつて生まれたのかというのは、たいへん興味深いテーマですね。これについてはいろんな説明ができるんだけど、大きなファクターとしては、やはり人が集団の中で暮らすようになったという事情がからんでくると思います。

集団の中で他者と協調していく生き方を選んだ人類が進化させたことの一つは、つねに他者の目を意識するということです。

長谷川 社会の中で協調して生き残っていくには、他者からの評価が大事ですものね。

山岸 だから人間の心というのは他者の視線に過敏に反応するようになっていっているんです。

「.:」のマジック

山岸 僕たちの実験で、あるとき、「これこれのシチュエーションのときに、あなたはどうしますか」というような設問に答えさせるテストをやってももらったことがあります。

たとえば、「大事な約束に遅れそうで急いでいるのだけれど、腰の曲がったおばあさんが横断

歩道を渡ろうとしている。おばあさんは歩くのが遅いから事故に遭うかもしれないが、しかし、彼女をエスコートしていたら遅刻してしまうかもしれない。どうしますか」というような質問ですね。

で、このテストでは、質問者が目の前にいるのではなくて、被験者は個室にいて、パソコンのディスプレイを通じて答えるようになっていのですが、その質問画面にはちよつとした仕掛けがしてあって、端っこに小さく三つの点が「∴」のように表示されているものと、表示されていないものがある。

すると「∴」と表示されている画面で答えた人たちのほうが利他行動を選ぶ、つまり遅刻してもおばあさんを助けるといふ答えを選ぶ人のほうが多くなった。

長谷川 それはなぜだと思われませんか？

山岸 これはおそらく「∴」の組み合わせだと、人間の脳はそこに顔を見ちやうからでしょうね。

長谷川 ああ、なるほど。上の二つの点が目で、下の一つが口。顔に見えないわけではない。山岸 逆三角形の点を人の顔だと認識する脳の働きのことを「シュミラクラ現象」と言うのですが、そのくらい、人間というのは他者の目線に敏感にできている。

先ほど、相手が自分を仲間だと認識していることに気がついていると、利他的な行動を選ぶようになるとお話ししましたが、それがここでも働いています。つまり、個室の中には自分以外は

いないのだけれども、逆三角形の点があることで、他者が自分の行動を見ているのだと誤認識するので、利他行動を選択するんですね。

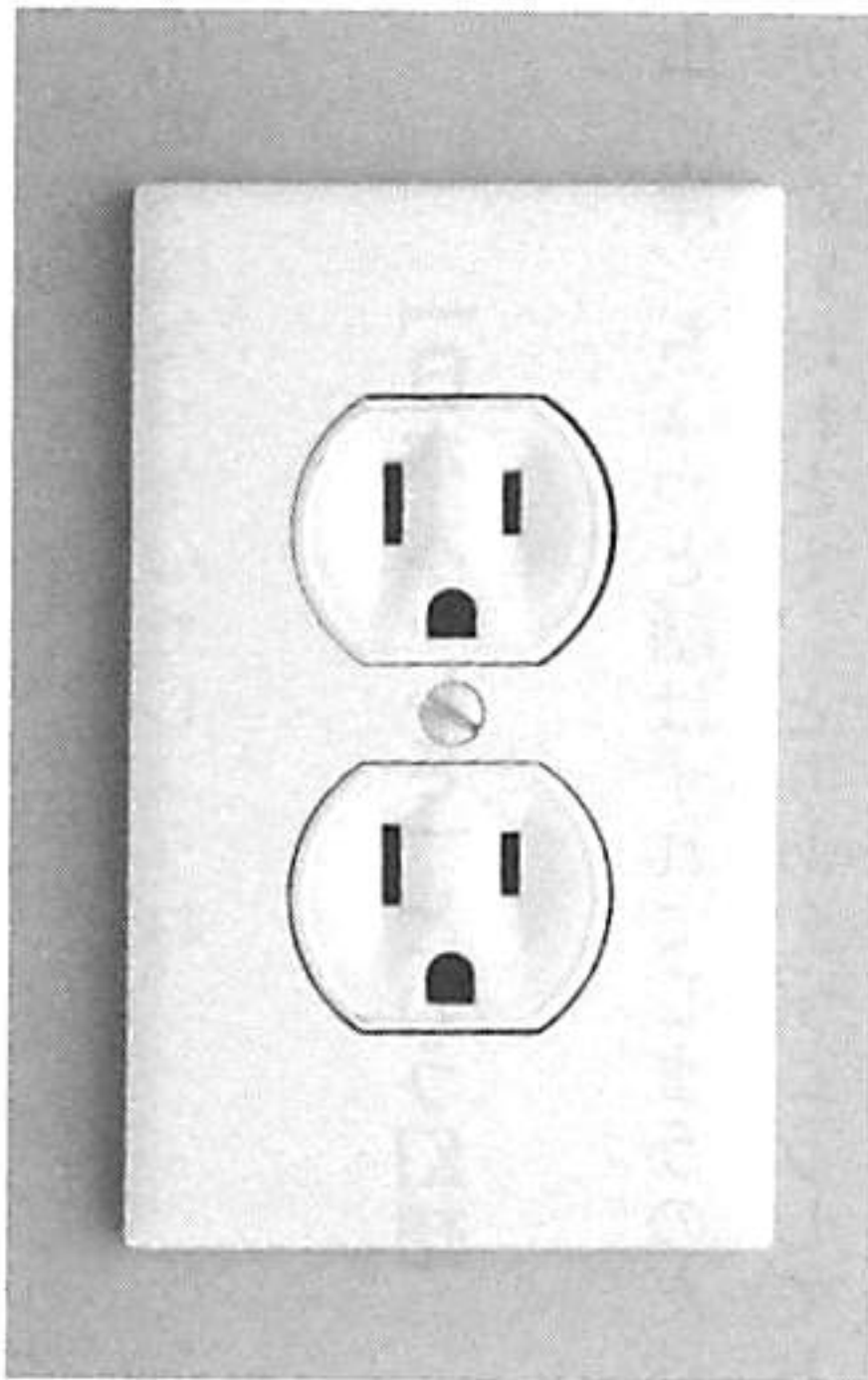
で、こうした心の働きが昂^{こら}じると、誰もいないのに「何者か」が見ているような気持ちが生まれてくるわけですね。

たとえば一人きりで部屋にいるときに、何か良からぬことをやったり、考えたりする。そのときに風か何かで部屋のドアがぱたんと閉まったりする。そういうときに、えてして人間は「ああ、これはそんなことをしてはいけないという神様のお告げなんだな」とか思ったりする。

長谷川 本当は誰もいないのに、「誰かがいる」と仮定して反応してしまうんですね。

山岸 そこで反射的にドツキリするんですが、部屋には誰もいない。そこで人間はいわば逆算して、「神様がいるんだろう」と推定するようにできているんですね。

長谷川 これも進化の面白いところで、「見渡したところ誰もいなければ好き勝手に振る舞ってよい」というルールを組み込んでもよかったですけれども、でも、それだと本当は誰か見ているのに気がついていないというリスクを冒す可能性もある。



ヒトの脳は「顔らしきもの」に反応するようにチューニングされている

だから、「たとえ人が周囲にいないようでも、いるかのように振る舞ったほうがいい」という仕組みになったんでしようね。

「日本人らしさ」という幻想

山岸 ちよつと話はずれてしまうのだけれども、私たちの研究では、そうした「状況がよく分からないけれども、とりあえずこうしておけば無難ぶなんだろう」と選択するのをデフォルトの戦略と呼んでいます。

長谷川 卑近な例で言えば、たとえば未知の人の家を訪問したら、美味しそうなケーキとお茶が出された。そのときにケーキに手をつけるか、つけないか。わざわざ出してくれているんだから食べても問題はないんだけれども、すぐに手を出すと凶々しいように思われるかもしれない。逆に手をつけないと好意を無にしたと思われるかもしれない。さてどっちを選ぶかというような話ですね。

山岸 そのとき、「心のあり方が行動のあり方も変えるのだ」と考える人たちは「日本人は遠慮深いから、出されたケーキは食べないだろう」「アメリカ人はフランクだから、出されたケーキを喜んで食べるはずだ」と思うわけなんですよね。たとえば文化心理学などではそのように考える人が多い。

長谷川　でもそれは違いますね。アメリカ人と日本人の行動が違うからといって、アメリカ人と日本人の心のあり方も異なると考えるのは誤った推測ですね。

山　岸　もちろん全体としては日本人のほうが遠慮する人が多いし、アメリカ人のほうが遠慮しない人が多いと思うけど、そのことは必ずしも「心の違い」を意味するわけではない。

長谷川　そもそも「日本人らしさ」とか「アメリカ人らしさ」といったものは幻想です。生物学的に見れば、日本人もアメリカ人もともにホモ・サピエンスです。そこに大差があるわけではない。

「ボールペン実験」はどこが間違っていたか

山　岸　ところがそうした基本的な事実が社会心理学者の中でも分からない人がいるんです。

以前、ボールペン選択問題という研究論文が発表されました。

それは簡単に言うと、空港で声を掛けた被験者に簡単なアンケートに答えてもらい、そのお礼としてボールペンを一本だけプレゼントする。その際に、実験者は五本のボールペンを一度に取り出して、その中から好きなものを選んでくださいと言うのですが、四本は同じ色で、一本だけが違う色なんです。そうやって実験したところ、白人は一本きりしかないボールペンを選び、東アジア系の人たちは多数派のボールペンを選んだ（ボールペンの色を三対二で分けた場合でも結果は同じでした）。

そこでこの実験をした人たちは「白人はユニークなものを選ぶ性質があるけれども、東アジア人は他者との協調を重んじる傾向があるので多数派のボールペンを選んだ」という結論を出した。長谷川 その説明を聞いただけでも、ずいぶん乱暴な研究だなあと感じますね。「最初に結論ありき」というか……。

山岸 この論文を読んだ瞬間に私もこれはひどいと思ったんですね。だから、すぐにこの実験が間違っていることを証明する実験をやった。

長谷川 すぐに実験して反証したというのがいかにも山岸先生らしい。

山岸 誰でも心当たりがあるでしょうが、人間というのは何でも自由に物事を決めていくように、実はそうでない。それをやったときに周りの人がどう思うかということも考慮しつつ、どうするかを決めるものです。

長谷川 ああ、なるほど。ボールペンを選ぶときにもその思惑おもわくが働いていると。

山岸 そのとおりです。だから、私がやったのはまず第一にボールペンを選択してもらったところまでは同じですが、選ぶ段になったところで実験者が「ちよつと用事があるので」と言っ席を外して、勝手に選んでもらってそのまま帰ってもらおう。そのときのボールペンの選択はどのようなかを調べたんです。

長谷川 面白い！

山岸 すると、誰もいない状況だと東アジア人（私の実験では日本人でしたが）でも白人と同じ比

率で、ユニークなほうのボールペン、一本だけ色が違うものを選んだ。

長谷川 要するに日本人は人目を気にしているわけで、けっして「控えめな心」の持ち主なんかではないと。

山 岸 それと同時にもう一つの状況を作って比較してみました。と言っても、こちらは実際に実験を行なうのではなく、「そのような状況だったらあなたはどうしますか」という場面想定法を用いたのですが、同じ場所に五人の被験者がいて、あなたが五人のうちで最初にボールペンを選ぶことになったら、少数派・多数派のどちらのペンを選ぶかを訊ねたんです。

長谷川 それは容易に想像がつかえますね。他の人たちがいる状況ではたった一本しかないユニークなボールペンを先に取るのは勇気が要ります。

山 岸 おっしゃるとおりで、こういう状況に置かれると白人でも日本人でも多数派のボールペンを選ぶ比率はほぼ同じになるんです。

長谷川 つまり、どっちのボールペンを選ぶかは「心」が決められているんじゃないかと、状況が決められているんだということですね。

山 岸 そして、その状況を明確にしてやれば肌の色や、育った環境は関係なく同じことをするということですね。なぜ最初の実験では同じにならなかったのかというと、それは被験者たちが自分の置かれている状況がよく分からなかったからです。

長谷川 つまり、本当はユニークなボールペンのほうがほしいのだけれども、はたしてそういう

ことをしていいのかよく分からないので、日本人はとりあえず無難なほうを選ぶ。まさにさっきのケーキの例と同じですね。

山岸 だから強いて言うならば、日本人と白人とでは状況がよく分からないときのデフォルト戦略は違う。日本人はとりあえず無難なほうを選ぶだけのこと、みんなと同じことをするのが好きなわけではないんです。

「日本人の美德」は状況の産物にすぎない

長谷川 いわゆる「日本礼賛論」では、かならず日本人には謙譲の美德がある、控えめであると、言うわけだけれども、それは何も日本人の心が奥ゆかしいわけではない。閉鎖的な日本社会だと、奥ゆかしそうに振る舞っているほうが諸事にわたって得だからということですね。

よく日本人は海外で成功する同胞を見て「あの人は特別だから」とか言うわけですね。つまり、日本人らしくないから成功したと暗に言っているわけですが、アメリカに行けばアメリカ人のように振る舞うほうが何事もうまく行くし、逆に日本にいたときのように周囲の目を気にしていたらとてもやっていけない。海外に行く人が変わってるんじゃない、海外に行ったら変わる。それだけのことですね。

山岸 それは私自身の経験でもありますね。私は若いころにワシントン大学に留学しました。

アメリカに行く前から、少々変わっていたとは思いますが、留学してそれに拍車がかかって、帰国したら周囲からはエイリアン扱いされました（苦笑）。

長谷川 「あいつは日本人じゃない」「アメリカかぶれした」と言われるわけですね。

山岸 まあ、そんな感じですよ。でも、アメリカに行ったら戦闘的になるとか、攻撃的になるとかそういうことではなくて、みんなが積極的に自己表現している状況だったら自分もそうしたほうが得だし、精神的にも楽です。だって自分だけが気を遣っていても周りからは評価されないわけですから、気を遣うだけムダというものです。だから、会議などでもはっきりと自己主張をすべきだというのをアメリカで再確認して、日本に帰ってきてでもそれを続けたものだからさうざん嫌われました。

長谷川 北大でもそんなものですか。北海道の人は世間からは「大陸的だ」と言われますけれどもね。

山岸 北海道の社会だって本土とそう変わリませんよ。

長谷川 まあ、日本社会で浮いているところというところは私も似たようなものですけれどね。

山岸 だからこそ我々は気が合うんじゃないですか。

長谷川 たしかにね。

山岸 で、ここのところは重要なので、もう一度繰り返しておきたいのですが、人間の心の働きそのものはどこの国、どこの地域、どんな人種であろうと変わりはありません。

長谷川 脳の仕組みには変わりがないんだから、それは当然なんですけれどもね。

山岸 ただ、そこでアジアとアメリカでボールペンのデフォルト戦略が違ってくるのはなぜかというのと、それは社会の作り方が違うからなんです。

つまり、日本のような社会では「とりあえず」多数派を選ぶほうがリスク回避できる社会であり、一方、アメリカでは「とりあえず」ユニークなほうを選ぶほうが有利な社会であって、その環境の違いが見た目の行動の違いにつながっているというわけです。

社会もまた環境の産物である

長谷川 だが、これに対して「社会の作り方の違いが国民性の違いということじゃないか」と言う人もあるかもしれません。

山岸 しかし、結論を先に言ってしまうえば、社会の作り方は大きく言えば二つしかありません。一つは集団主義的な社会、そしてもう一つは個人主義的な社会——前者は閉鎖的な社会、後者は開放的な社会と言ってもいいでしょう。

長谷川 山岸先生はそれぞれを「安心社会」、「信頼社会」と定義されていますよね。人々が相互に監視し合うような閉鎖的な社会では「安心」は担保されるけれども、実はおたがいをそんなに信頼しているわけではない。逆に開放型の社会だと、人の出入りが自由なのでおたがいの素性が

よく分からないので安心はないけれども、でも、おたがいを信頼し合っていくことでメリットを産み出していける。

山岸 戦後の日本社会はずっと前者、つまり集団主義的で閉鎖的な傾向を持っていたことは改めて説明するまでもないでしょうし、アメリカは相対として開放的な社会であることにも異論はないでしょう。でも、アメリカでも田舎のほうに行けば、やっぱり日本のムラ社会のようによそ者を排除して、メンバー同士の評判を気にするところもある。

長谷川 地域共同体に限らず、メンバーが固定化しているところだったらどこでも人間は閉鎖的な社会を作りますね。その典型例が戦後日本の企業組織。長いこと、終身雇用で年功序列制だったから社外の評判よりも、社内の評価のほうが大事で、「出る杭は打たれる」。

山岸 でも、そうした閉鎖的な社会のあり方はダメで、開放的な社会でなければいけないという単純な話ではありません。

長谷川 そもそも、その社会がどのような環境、条件に置かれているかによって社会のあり方も決まってくるというわけですから。

山岸 そのとおりなんです。細かい説明はここではしませんが、戦後の日本の置かれた環境では集団主義的な社会が作られたわけですが、状況が変われば日本も個人主義的な社会にもなる。

長谷川 実際、戦国時代なんかはものすごく個人主義的な社会になりましたし、また幕末維新期もそうだったようですね。

山 岸 そのような時代だと集団主義的な社会の作り方では立ちゆかなくなるので、自然と個人主義のほうに向かっていくわけですよね。

長谷川 で、戦後の日本はずっと集団主義的なやり方のほうがメリットがあつたわけですが、国際環境が変化して、冷戦が終わり、経済のグローバル化が進んできたためにそのメリットはなくなつて、今は個人主義のほうにシフトしようとしているわけですが、どうもその環境適応がうまくやれていない。

山 岸 まさにその「適応」が問題なんですよね。本当は社会の作り方のほうを変えていかないといけないのですが、それをお説教とか心がけで対応しようとしている。

これについては、この後も採り上げていきたいんですが、それぞれの社会の作り方に対応した行動の違いはありますが、それは「国民性」の違いといったものではないということとは理解していただきたいですね。

長谷川 どこに暮らそうと人間は人間であつて、マーガレット・ミードが描くような「驚くべき楽園」なんていうのも存在しないんです。

きずなと思いやりが日本をダメにする
長谷川真理子 × 山岸俊男・著

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定価：1,600 円（本体）＋税

発売日：2016 年 12 月 15 日

ISBN：978-4-7976-7332-6 C0036

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)